第2単元　単元の概要

単元設定のねらい

第2単元「読みの深まり」は、「解釈の多様性楽しむ」を能力目標とする。小説や詩歌を読み味わう活動を通して、生徒たちに想像の翼を逞しく広げさせたい。

特に「学習指導要領」が「文学国語」の目標として掲げている「深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばす」を達成するために、生徒たちには、小説の登場人物の状況を読み解いた上で、その心理に寄り添うひとときをもたせたい。作品内の世界をのびやかに想像し、自らの思いを自分の言葉で発表できるよう導きたい。

また、「文学国語」の内容の［知識及び技能］に挙げられている「我が国の言語文化の特質について理解を深める」「人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする」を実現するため、季節を表す伝統的な言葉や、現代的な社会状況や、自然豊かな地方の暮らしぶりなどが授業中の討論の話題となるよう、この単元を設定した。

教科書のページに沿って学習するならば、この第2単元が、小説の読解の入口となる。読みやすいが、実は巧妙に意外な展開が仕組まれている現代小説二編。作家の経歴がわかるインタビューと、読み比べたくなる詩歌。楽しく読めて、実は思いがけない世界へ連れて行かれる教材をもとに、教室での活発な話し合い、学び合いを通して、学習者自身が、文学作品の解釈の可能性を大きく広げていける単元となっている。

以上の考え方に基づいて、本単元には、次の教材を配列した。

第1教材「予感」……能力目標「解釈の多様性を楽しむ」、学習活動のポイント「物語の展開に伴って疑問が深まっていく過程を読む」を掲げる。主人公「わたし」が不条理な出来事に出会い、自分を見失いそうになりながらも、思いがけない境地に導かれる過程を読み、次第に疑問が膨らんでいく展開を詳細にたどる。

第2教材「雉始雊」……能力目標「解釈の多様性を楽しむ」、学習活動のポイント「物語の展開に伴って全容が明かされていく過程を味わう」を掲げる。小説の結末で、ある作品内事実が明らかになるという展開を的確に読み取り、作品に仕掛けられたさまざまな工夫を捉える。

また、単元扉には、学習者の問題意識を喚起するために、次のような呼びかけを記した。

> 物語には答えの出ない問いがここかしこに埋まっている。多様な考え方や解釈を交流させ、一人一人の読みや考えを深めよう。

本単元での学習を通して、文学作品の解釈の可能性を広げるとともに、作品内の言葉を手がかりに人物の心理や出来事を深く読み解く力を身につけさせていくことをねらいとする。

単元の構成表

配当時間	「教材名」 ●教材のねらい	学習指導要領の中心指導事項	観点別の評価規準
8 （4） （4）	「予感」 ●さまざまな読み方を考える 「雉始雊」 ●読みの広がりを追う	〔知識及び技能〕 我が国の言語文化に関する事項 イ　人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。 〔思考力、判断力、表現力等〕 読むこと エ　文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察すること。	知識・技能 ・人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めている。 思考・判断・表現 ・文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察している。 主体的に学習に取り組む態度 ・人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めたり、文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察したりすることに向けた粘り強い取り組みを行う中で、自らの学習を調整しようとしている。

第２単元 第１教材

予感

◆青山七恵

教材採録のねらい

不思議な感触の小説である。読みながら疑問は幾つも浮かぶだろう。

主人公の家はなぜ消えたのか。旅行で一定期間不在だったとはいえ、住人が知らないうちにマンションを取り壊すなどということがあるだろうか。いくら主人公が不注意だとしても、事前に通知くらいはあったはずだろう。家具や荷物はどうなったのか。やってきた警察官は何をしているのか。警察はこの事態をどう捉えているのか。主人公も、明日の出勤に着ていく服よりほかに考えるべきことがあるだろう。遠くに住んでいるらしい家族に過去のことを含む自分の不運を泣いて訴えるより、近くにいる友人や知人に状況を説明して助力を求めるほうが得策ではないか。末尾の電話の声は……。不可解な現象や、疑問を差しはさみたくなるような人物の思考・行動は幾つも挙げられる。

だが本作は寓話ではない。この小説の世界は、非現実的でも、幻想的でもない。主人公は現代の日本の社会に生きる一人の若い女性であり、ここに描かれているのは彼女が経験するある日のできごとである。

なるほど、めったにありそうもないことは起こっている。しかし絶対にありえないことではない。例えば主人公の家は、夢のように消え失せたのではなく、「取り壊されただけのよう」（33・9）である。マンションが取り壊されたのは、畑にするためかもしれないと主人公は考えている。「実際、東側の隣の敷地はすでに畑だった」（34・2）。ありそうもないことだが、現実的な説明はつけられなくはない。作中には、事態に現実的な説明をつけることを可能にするような手がかりが用意されている。事態はむしろ妙に現実的に描かれていると言うべきである。本作は、主人公の経験を、現実の世界のできごととして成立しうるぎりぎりのラインで提示しているのである。

したがって、指導上のポイントは、わからないことはわからないままにした上で、本作の核となる点―主題や表現―を取り出すことにある。読みながら浮かんでくる幾つもの疑問は、無理につじつまを合わせて解消するのではなく、疑問のままに保ちたい。

それを可能にするのが、一人称小説という本作の形式である。例えば、本文には「家は消えたというより取り壊されただけのようだった」（33・9）とあるが、これを根拠に、家は消えたのではなく取り壊されたのだ、と確定することは避けたい。一人称小説である以上、この箇所では、取り壊されたようだという主人公＝「わたし」の認識が示されているのであり、それをこの世界における事実として確定することはできない。この箇所から取り出すべきは、家が取り壊されたかどうかではなく、「わたし」が「立ち上がって目の前の更地をよく見」（33・7）て、そうかもしれないと考えていること、すなわち、最初はパニックに陥って「道端に座り込んでぶるぶる震えていた」（32・8）「わたし」が徐々に落ち着き、事態に対処しはじめていることである。そして「わたし」がそのように行動したのは、「こういう大きな災難が起こったときにはまず、実家に電話しようと決めていたことを思い出し」（33・2）たためであった。座り込んでいた「わたし」が立ち上がって目の前の更地を観察するのは、実家に電話をかけている最中、その「応答を待つあいだ」（33・7）なのである。

このように、本作の指導に際しては、あくまで主人公であり語り手である「わたし」に即して、その行動と心情の変化を理解することが肝要である（「課題1」参照）。それは警察官の対応や、電話口の向こうの声についても同様である。警察や実家の家族（父・母・祖母）の意図を探るのではなく、「わたし」の認識の範囲で考えるように、発問の仕方には十分注意する必要があるだろう。

◉主な学習内容

・主人公が抱いていた「予感」の内実を理解する。
・主人公にとって「実家」がもつ意味を理解する。
・主人公の経験を通して、自分の人生を生きるとはどういうことか、考える。

教材の概要

◉主題についての考察

人が自分の人生を生きるとはどういうことか。本作は、電話口の向こうの「父と母とおばあちゃん」の声が主人公に告げる、「それはおまえがおまえの人生を生きている証拠じゃないの」という言葉によって締めくくられている。突き放すようにも励ますようにも聞こえるこの言葉を、主人公の「わたし」が聞いてどう思ったのかは、記されていない。本作は、地の文ではなく会話で、それも一人称小説でありながら主人公以外の人物の発言によって終わっている（会話ではあるが、「　」（かぎかっこ）は付されていない。この点については、「表現の特色」参照）。主人公はこの言葉をどのように受け止めたのだろうか。書かれていないこの内容を考えることが、すなわち、本作の主題を考察することになる（「課題4」参照）。

キーワードは、「予感」と「実家」である。本作の主人公である「わたし」は、自分の未来に対して漠然とした不安を抱いて生きている、一人暮らしの若い女性である。タイトルの「予感」が意味するのは、主人公のこの不安である。それは仕事や私生活に関する具体的な不安ではない。本文中の言葉を借りれば、いつか何かが起こるのではないか、という漠然とした不安である。きっと自分はいつか何らかの災難に遭うだろう。それがいつであり、何であるかは分からない。本作の主人公は、そのような「予感」を抱いて一人で生きていた。

ここで言う一人で生きているとは、「実家」から離れて暮らしていることと同義である。主人公は、家族のいる場所（家や土地）を離れて、新しい家族や同居人を持たずに、自分で働きながら、賃貸マンションの一室を借りて一人暮らしをしていたようである。主人公はこの日、一人で住んでいたその家を唐突に失う。この経験は、主人公において「予感」の的中として受け止められている。主人公は、いつか何かが起こったときにはまず「実家」に電話

しようと決めていたことを思い出し、その指針に従って電話をかけ、事態に対処していく。

いつか何かが起こるという「予感」を抱いていた主人公は、「実家」に電話をかけることを定めておくという形で、それに備えていた。「予感」は、「実家」から離れて一人で生きている主人公の不安に由来するが、電話をかけることを決めていたというのは、離れていながらも主人公が「実家」を頼りにしていることを表している。主人公は物理的には「実家」から離れて一人で生きているが、心理的にはいまだ「実家」を離れていない、とも言えよう。これを若い主人公の未熟さと見ることもできる。だが主人公は、「実家」に電話はかけるが、事態には一人で対処している。一回目にかけた「実家」への電話がつながらないことの意味は大きい。そもそも「実家」に電話をかけることも、主人公が自分の中で決めていたことであり、そのように「予感」に対して備えておくことで、それを一つの支えとして、主人公は一人で生きてきたのだと思われる。

自分自身の人生を生きるとはどういうことか。本作はその答えを示すわけではない。一人で生きる不安にもとづく漠然とした「予感」を抱いていた主人公は、この日、その「予感」が現実化したような経験をし、それに一人で対処し、そして最後に、父・母・祖母の「三人の誰でもないようで三人全員の声」によって、それは自分の人生を生きている証拠だと、突き放すような励ますような、また諭すような言葉を投げかけられる。電話口の向こうの声は、「実家」の総体、総意とでも言うべきものとして、主人公には聞こえただろう。主人公が「実家」から届いたこの言葉をどのように受け止めたのかは、記されていない。本作はそれを書かないことで、主題について考えるための空所を用意しているのである。

◉表現の特色

本作は一人称小説である。主人公の「わたし」の限定された視点で、旅行から帰ってきたところから就寝までのおそらく数時間程度の時間が、現在進行形で語られていく。その中で、今回の旅行中の災難、夏にマンションの三階の廊下から畑を見おろしたこと、あるいは中学生のときに公衆電話から一一〇番にかけたことなど、「わたし」の過去の経験が断片的に想起される。この一人称の形式が、本作の全体に関わる表現上の特色である。

また、本作の一部には、会話に「　」（かぎかっこ）をつけない特異な表現が見られる。結末部の、「わたし」と実家の父・母・祖母の会話の、そのまた一部である。本作において、「わたし」は一一〇番にかけたときに応答した女性や、派遣されてきた警察官と、多少の会話を交わしている。だがそれらのやりとりは、いずれも直接話法の形では示されていない。

結末部で「わたし」は二度目に実家に電話をかけ、母、父、祖母と順に会話を交わす。最初の、「『もしもし？』」、「『どうした？』」、「『お父さん？』」、「『おばあちゃんだよ』」という短いやりとりは、すべて会話に「　」がついている。これらの発話は、それが誰のものであるか、とりあえずは同定されている。順に、母、父、「わたし」、祖母の発話である。この時点では、電話口の向こうの声は、「三人の誰でもないようで三人全員の声だった」ということはなく、電話を取ったのは母だと思うと父に替わり、さらに祖母が出る、というように、入れ替わり立ち替わりしているものと考えることができる。その後の「わたし」の発話は、「わたしは帰ってきたら家がなくなっていたことを話した。」のように、間接話法の形で示されている。それに対して「ときどき咳込みながら相槌を打つ電話口の向こうの声」が、「三人の誰でもないようで三人全員の声」へと、奇妙に変容する。そして、最後の「わたし」の訴えとそれに対する父・母・祖母の返答だけが、「　」（かぎかっこ）をつけずに示される。つまり結末部では、三種類のパターンで、電話越しの会話が書き分けられているのである。末尾の「わたし」の訴えとそれに対する父・母・祖母の返答に「　」（かぎかっこ）がついていないことの表現効果は、それ以前の会話に「　」がついていることをふまえ、直前の「電話口の向こうの声

は、三人の誰でもないようで三人全員の声だった。」という一文を手がかりに考えたい。考えられる効果の例としては、

・「わたし」に聞こえる電話口の向こうの声が父・母・祖母の三人の誰でもないようで全員の声であるという奇妙さを表す効果
・「わたし」が父や母や祖母といった特定の個人ではなく、その総体としての家族と会話していることを表す効果
・「わたし」が本当に実家に電話をかけているのか、電話が本当に実家につながったのかが確定できない、夢の中のできごとのような印象を与える効果
・最後の発言を、読者に対するメッセージとして印象付ける効果

などが挙げられよう。

◉作者

青山七恵（あおやまななえ）

小説家。一九八三（昭和五八）年、埼玉県大里郡妻沼町（当時）に生まれる。小学生の頃から本に親しみ、図書館司書を志す。高校卒業後、図書館情報大学図書館情報学部図書館情報学科に入学（大学の統合により卒業は筑波大学図書館情報専門学群）。

小説を書きはじめたきっかけは、高校二年生の時に読んだフランソワーズ・サガン『悲しみよこんにちは』だという。サガンについては、インタビューや対談等で繰り返し語っている。二〇〇五（平成一七）年、大学在学中に執筆した「窓の灯」で文藝賞を受賞。旅行会社に勤務しながら小説家として活動を開始する。文藝賞受賞第一作に当たる「ひとり日和」で二〇〇七（平成一九）年、芥川賞受賞。二〇〇九（平成二一）年、「かけら」で川端賞受賞。二十六歳での受賞は歴代最年少であった。同年、旅行会社を退職。また同年、初の長篇小説となる『魔法使いクラブ』を書き下ろし刊行。以後現在まで、コンスタントに長篇小説を発表し続けている。

若い女性を視点人物に設定し、日常を淡々と描く作品で評価を得てきたが、「快楽」や「めぐり糸」など近年の長篇小説では異なる土地や時代を舞台に濃厚な人間関係を描き、新たな境地を見せている。

【略年譜】

一九八三（昭和五八）	埼玉県大里郡妻沼町（現熊谷市）に生まれる。
一九九八（平成一〇）	埼玉県立熊谷女子高等学校入学。
二〇〇一（平成一三）	埼玉県立熊谷女子高等学校卒業。図書館情報大学図書館情報学部図書館情報学科入学。
二〇〇五（平成一七）	筑波大学図書館情報専門学群卒業。東京都新宿区の旅行会社に入社。大学在学中に執筆した「窓の灯」で第四二回文藝賞受賞。『窓の灯』刊行。
二〇〇七（平成一九）	「ひとり日和」で第一三六回芥川龍之介賞受賞。『ひとり日和』刊行。
二〇〇八（平成二〇）	『やさしいため息』刊行。
二〇〇九（平成二一）	旅行会社を退社。フランスに語学留学。「かけら」で第三五回川端康成文学賞受賞、『かけら』、『魔法使いクラブ』刊行。『魔法使いクラブ』は著者にとって初の長篇小説で、以後長篇の執筆が増える。
二〇一〇（平成二二）	『お別れの音』刊行。

二〇一一（平成二三）	長篇小説『わたしの彼氏』、長篇小説『あかりの湖畔』刊行。
二〇一二（平成二四）	群像新人文学賞選考委員。連作短篇の形式をとった長篇小説『花嫁』刊行。長篇小説『すみれ』刊行、第二九回織田作之助賞候補。
二〇一三（平成二五）	長篇小説『快楽』刊行、第三〇回織田作之助賞候補。長篇小説『めぐり糸』刊行。
二〇一四（平成二六）	「すばる」一月号の「新年掌編競作」の一篇として「予感」発表。『風』刊行、表紙の裏に緑色の手書きの文字で「予感」を収める。
二〇一五（平成二七）	長篇小説『繭』刊行。「現代版」絵本御伽草子『鉢かづき』刊行。
二〇一六（平成二八）	絵本『わたし、お月さま』刊行。
二〇一七（平成二九）	『ハッチとマーロウ』『踊る星座』刊行。
二〇一八（平成三〇）	『ブルーハワイ』刊行
二〇一九（令和元）	『私の家』刊行。
二〇二〇（令和二）	『みがわり』刊行。

◉出典

本文は『風』（二〇一四年、河出書房新社）によった。
初出は雑誌「すばる」二〇一四年一月号。単行本収録時に一部改稿が行われている。

学習指導の展開

◉学習目標と評価

教材名	配当時間	教材のねらい
予感	4［読むこと］	さまざまな読み方を考える

学習活動のポイント

・物語の展開に伴って疑問が深まっていく過程を読む
・〔探究〕作者自身のコメントから物語のはたらきについて考える

学習指導要領の指導事項

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等
文化イ　人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。	読むエ　文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察すること。

言語活動例

評価の観点	観点別評価規準	評価方法	支援（Bを実現していない生徒への手立ての例）
知識・技能	①人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めている。	記述の観察	主人公「わたし」が体験したことを、順を追って説明させる。
思考・判断・表現	②文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察している。	記述の観察	作品内に仕組まれた謎を一つ一つ取り上げ、それらに何の解決も与えられていないことを確認させる。
主体的に学習に取り組む態度	③人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めたり、文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察したりすることに向けた粘り強い取り組みを行う中で、自らの学習を調整しようとしている。	行動の観察	現代社会の中で、個人が「家」を守り、自分を続けていくことの大変さ、存在の不確かさについて、本文に即して考えさせる。

教材に即した評価の実際

主人公「わたし」の不条理な体験をたどり、社会と個人とのつながりの不確かさを捉えている。

主人公「わたし」の体験したことの意味を考え、次第に謎が深まる展開になっていることを捉えている。

現代社会の中で、個人が不確かな形で存在していることを読み取り、人が生きていく上で背負うものについて考えている。

◉学習指導展開例　※評価の番号は、「◉学習目標と評価」の番号と対応しています。

時間	目標	学習活動と指導内容	指導上の留意点	評価
第１時限	・本文を通読し、初読の印象を言語化できる。 ・物語の展開を把握できる。 ・主人公の人物像を把握できる。 ・主題について考察できる。	**導入** 1　本文を通して音読する。 2　疑問に思ったことをノートに書く。 ※「なぜ～だろう（か）？」という形で疑問を書き出す。 **展開１** 1〔羅針盤　課題１〕に取り組む。 ●「わたし」の行動を整理する。 ●「わたし」の行動と、気持ちの変化を整理する。 **展開２** 1〔羅針盤　課題２〕に取り組む。 ●「わたし」に関する情報を本文全体から集め、「わたし」という人物についてイメージする。 ※年齢、職業、性別など。 ●「わたし」はどのような人物か、「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった。」（32・4）という箇所を中心に読み取る。 **展開３** 1〔羅針盤　課題３〕に取り組む。 ●「わたし」が「実家」のことをどのような存在だと捉えているか、以下の二つの行動を手がかりに整理する。	・自らの初読の印象を疑問という形で言語化することを目的とする。発表させたり少人数で示し合ったりさせて、疑問を共有してもよいだろう。 ・本作は一人称小説である。「わたし」がどのような人物であるかは、「わたし」が語るところから読み取るほかない。例えば、「不注意な自分」（32・6）のような箇所は、「わたし」が不注意な人物だというより、「わたし」が自分のことを不注意だと捉えていることを示していると読むべきだろう。「わたし」がどのような人物か、具体的にイメージしてみるところからはじめて、徐々に本作の主題に関わるところに踏み込みたい。 ・「予感」という本作のタイトルになっている単語が登場する箇所であり、そのことに注意を促しておく。 ・第1時限で整理した「わたし」の人物像や、「わたし」が抱いていた「予感」について、振り返った上で進めたい。	①　② ①　②

第２時限	第３時限	第４時限
・「大きな災難が起こったときにはまず、実家に電話しようと決めていたことを思い出し」（33・2）、電話をかけた。 ・再び電話をかけ、「帰ってきたら家がなくなっていたこと……それまでに起こったありとあらゆる不運について」（35・14～36・2）泣きながら話した。 ●再び電話した相手の声が二転三転しているように「わたし」が感じたのはなぜか、考える。 2〔協働的な学びのために〕に取り組む。 ●「わたし」にとって「実家」はどのような存在かグループで交流する。	・末尾の言葉を解釈することで、物語に対して自分の考えをもつことができる。	・探究教材との重ね読みを通して、自分の考えをもつことができる。
まとめ 1〔羅針盤　課題４〕に取り組む。 ●「贅沢なことを……証拠じゃないの。」（36・9）という末尾の言葉を、「わたし」はどのように受け止めただろうか。各人で考えをまとめて話し合う。		**探究** 1〔探究　考えを深める〕に取り組む。 ●探究教材を読んで、これまで読んできた物語や小説の中で、「物語の力」を感じた作品について、文章にまとめる。 2　学習の振り返りを行う。
・関連して、結末部の会話に「　」（かぎかっこ）がついていないことにも注目させる。 ・自分の人生を生きるとはどういうことか、主人公の経験について考えることを通して、各人が自分の考えをもつことを目指す。		・具体的な作品を挙げてまとめさせる。 ・学習の成果と課題を自分の言葉でまとめさせる。
①　②		③

教材の解説と研究

◉全体の構成

段落	ページ・行	大意
第一段	初め～35・11「しばし眺めた。」	**実家への最初の電話** 家が消えるという災難に見舞われた「わたし」は、激しく動揺する。「わたし」は大きな災難が起こったときにはまず、実家に電話しようと決めていたことを思い出す。電話はとられなかったものの、実家に電話をかけることで落ち着きを取り戻した「わたし」は、一一〇番にかけ、警察官の指示に従いホテルにチェックインする。
第二段	35・12「部屋の灯りを消したあと…」～終わり	**実家への二度目の電話** 「わたし」はもう一度実家に電話をかけ、電話口の向こうの父・母・祖母にこれまでに見舞われた災難について泣きながら話をする。

【参考】

ごく短い作品であり、段落を分ける必要はないと思われる。全体を把握するには、形式段落を用いて段落を分けるより、物語の展開に即して内容を整理するのが望ましい（「課題１」参照）。

その上で、強いて段落を分けるなら、右のような案が考えられる。主人公がもう一度実家に電話をかけるところから終わりまでを結末部とした。やや変則的な区分であり、授業の序盤で提示するには適さないため、注意が必要である。

結末部では、電話口の向こうの父・母・祖母の声が混じって聞こえるという不思議な現象が起きている。なるほど、旅行から帰ると家が消えていた、というはじまりからして、既に現実にはありそうもない事態ではある。だが本作はその非現実的な状況を、ぎりぎりありえなくはない範囲で説明しようとしてきた。結末部は、それとは感触の異なる非現実性を備えている。一つの解釈の可能性として、「部屋の灯りを消したあと、……」（35・12）とはじまるこの段落から終わりまでを、「わたし」の夢の中のできごとだと読むこともできる。登場人物の発話を「」（かぎかっこ）をつけずに示す特異な表現も見られる。

右の案のほか、場所の移動を根拠に、「とんだ災難だったけど、……」（35・3）以降を後半部とする区分も考えうる。家があった場所／ホテルを、前半／後半とする区分である。機械的でわかりやすいが、この場合、前半と後半で何らかの質的な転換が起こるわけではない。読解につながらない区分を提示することは避けたほうがよいだろう。

◉大意

【二〇〇字】

旅行から帰ると家が消えていた。いつか何かが起こるという予感はあったものの衝撃は大きく、「わたし」は災難が起こったときにはまず実家に電話しようと決めていたことを思い出す。電話はとられず、「わたし」は一一〇番にかける。ホテルに移動した「わたし」は再び実家に電話をする。これまでに見舞われた災難について泣きながら訴えると、電話口の向こうの父と母と祖母は、自分の人生を生きている証拠だと返答した。（一九四字）

【一〇〇字】

旅行から帰ると家が消えていた。予感はあったものの衝撃を受けた「わたし」はまず実家に電話するがとられず、夜にかけなおす。これまでの災難を訴えると、父と母と祖母は自分の人生を生きている証拠だと返答した。（九九字）

◉展開図

過去	現在（今日）	未来
・（中学生のとき）公衆電話から一一〇番にかける ・交通事故 ・旅先での二度の置き引き被害 ・（一昨年）ひったくりに遭う ・（今回の旅行）財布入りのバッグをまるごと置き引きされる（三度目） いつか何か（＝災難）が起こるという「予感」を抱いて生きている ＝ 大きな災難が起こったときにはまず実家に電話しようと決めている	◎旅行を終えて帰ってきたら家が消えていた どうしよう？ ・実家に電話をかける ← ・一一〇番にかける ← お金、明日の出勤はどうしよう？ ・再び実家に電話をかける 自分の人生を生きるとは？	？

◉語句・文脈の解説

［32ページ］

1　旅行を終えて帰ってくると、わたしの家は消えていた　効果的な書き出しである。この一文によって、主人公が突如その中に投げ出された不条理とも言える状況を、読者もそのまま引き受けざるを得なくなる。これは「～ていた」という完了の文末表現の効果である。もちろん疑問は幾つも浮かぶだろう。「なぜ？」「なにがあったのか？」というように。だがその疑問は主人公のものでもある。家が消えたという状況は動かない。「わたし」は衝撃を受け激しく動揺するが、それを前提に行動するしかない。読者もとりあえずこの状況を受け入れ、以下を読み進めることになる。

3　持ち家でなくとも家は家、唯一無二のわたしの家だ　「わたしの家」と呼ばれているのは、一軒家ではなく、マンションの一室である。また、「わたし」はそこを借りているのであって、購入して所有しているわけではない。恐らく「わたし」は、不動産屋を介して持ち主（大家）と契約を交わし、給料から月々の家賃を払い、例えば二年間なら二年間といった期間を限った契約で、そこに住んでいるのだろう。だから「正確には」、それは「家」でもなければ、「わたしの」でもない。正確に言うなら、消えていたのは、「わたしがその三〇三号室を借りている賃貸マンション」（32・2）である。しかしそれでも「わたし」は、「家は家、唯一無二のわたしの家だ。その家が消えてしまった」と考える。「わたし」の体験としては、「わたしが一室を借りているマンションが消えた」ではなく、かけがえのない「わたしの家が消えた」なのである。

3　唯一無二　ただ一つだけで二つとないこと。

4　いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった　タイトルにもなっている「予感」だが、その内容は「仕事から帰ってきたら家が燃えていたり水浸しになっていたり空き巣と鉢合わせしたりすること」（32・4）とあり、「わたし」は自分の所有するものがいつか突然失われたり損なわれたりするという不安を抱えていたと考えられる。その根底には「わたし」が自分を「不注意」（32・6）だと思っており、これまでも何度も不運な目に遭ってきたということがある。

5　鉢合わせ　互いに思いがけず出合うこと。

5　ありえなくはない　二重否定による表現。「もしかしてあるかもしれない」という程度で、実際に起こる可能性は低いと考えていたのだろう。

6　今回の旅行でだって財布入りのバッグをまるごと置き引きされている。旅先での置き引き被害は三度目　「わたし」が「いつか、これに似た何かが起こるという予感」を抱いていた理由の一端が示されている。

8　とはいえ家が消えたのはさすがにこたえた　「さすがに」は、そうは思うものの、やはり、そうではあるが、という意味。「わたし」は、不注意な自分のことだから、いつか何かが起こると「予感」していた。さまざまなことを予想し、「ありえなくはない」とわかっていたにもかかわらず、そうはいってもやはり、「わたし」は家が消えるという事態に大きなショックを受けている。だとしたら、予感し備えることに、過去に起きたことと類似する何かが未来に起こると想定することには、どのような意味があるのだろうか。このあとの「わたし」の行動に注目したい。

8　こたえた　「こたえる」は、刺激を身にしみて感じること。身にこたえる。

問　**「わたしの家」（32・1）を言い換えている箇所を本文中から抜出しなさい。**

答　「わたしがその三〇三号室を借りている賃貸マンション」（32・2）

問　**「家は消えていた」（32・1）とあるが、「消えた」を別の表現で言い換えている箇所を本文中から探しなさい。**

答・取り壊された（「家は消えたというより取り壊されただけのようだった」〔33・9〕）
・なくなっていた、ない（「家がなくなっていて困っている」〔34・10〕、「わたしは帰ってきたら家がなくなっていたことを話した」〔35・14〕、「家がないんだよ。わたしは泣きながら言った」〔36・5〕など）

問　**「旅行を終えて帰ってくると、わたしの家は消えていた。」（32・1）という書き出しの一文には、どのような効果があるか。本文中の語句を用いて同じ内容の一文を作り、それと比較することで、考察しなさい。**

答〈同じ内容の一文〉
・「旅行を終えて帰ってくると、わたしがその三〇三号室を借りている賃貸マンションが取り壊されていた。」

〈効果〉
・突然不条理な状況に直面した主人公の当惑や動揺を、読者に共有させる効果。

（解説）　書き出しの一文の効果を、①「わたしの家」という表現、また、②「家」と「消える」という語の組み合わせによって説明するという課題である。後に続く箇所には、①「わたしの家」、②「消える」をそれぞれ言い換えた別の表現が見られる。それらを用いて、同じ内容を述べる一文を作ってみると、書き出しの一文の効果が理解されるだろう。

問　**「持ち家でなくとも家は家、唯一無二のわたしの家だ」（32・3）とあるが、どういう意味か、説明しなさい。**

答　権利の上では自分の所有物でなく、また建築物としても一軒家ではないが、自分にとってはかけがえのない自分の家であるという意味。

問　**「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった」（32・4）とあるが、「これ」が指す内容を説明しなさい。**

答　旅行から帰ってくると自分の家が消えていたこと。

問　**「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった」（32・4）とあるが、「わたし」はどのようなことが起こると予感していたのか。本文中に挙げられている例を抜き出しなさい。**

答　「仕事から帰ってきたら家が燃えていたり水浸しになっていたり空き巣と鉢合わせしたりすること」（32・4）

問　**「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった」（32・4）とあるが、「わたし」はなぜそのような予感をもっていたのか。**

答　自分のことを不注意な人間だと思っており、これまでも不運な目にあってきたから。

問　**「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった」（32・4）とあるが、実際に起こったことと、予感していたことやこれまで経験してきたこととは、どのような点で似ているか。**

答・突然災難に見舞われるという点。
・自分が所有するものが失われたり損なわれたりするという点。
・自分がその対象から目を離した隙に、それが失われたり損なわれたりするという点。

（解説）　「旅行を終えて帰ってくると」（32・1）と、「仕事から帰ってきたら」（32・4）は、状況が似ている。「鉢合わせ」（32・5）や置き引き被害も、突然それに遭遇するという点が共通している。また、「わたしの家」（32・1）が消えることと、それが燃えたり、水浸しになったり、空き巣に入られたりすることとは、いずれも自分の所有するものが損なわれるという点で似ている。財布入りのバッグなどを置き引きされたという経験も、自分の持ち物を奪われるという点で共通している。

問　**「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった」（32・4）とあるが、「わたし」がこれまで経験したりこれから起こるであろうと予期していたりした災難や不運と比べて、家が消えるという今回のできごとが「わたし」にとって大きいものであることがわかる箇所を、本文中から抜き出しなさい。**

答・「とはいえ家が消えたのはさすがにこたえた」（32・8）

・「でも今度は家だよ、家がないんだよ」（36・5）

（解説）　類似とともに、差にも注目したい。これまで「わたし」が経験した災難や不運、またこれから起こるであろうと予感していた災難や不運と、旅行から帰ったら家が消えていたという今回のできごととは、突然自分のものを失う、損なわれるという点で似ているが、程度において異なるものでもある。家が消えることは、これまでの災難や不運の延長線上にあるが、同時に、それらを程度において上回ることでもあるのだ。

タイトル

青山七恵の小説のタイトルは総じて短くシンプルである。まず、一語のタイトルが多い。本作の「予感」もそうだが、「かけら」「花嫁」「すみれ」「快楽」「風」「繭」など、いずれも日常的に用いられる普通名詞である。その他、二語を組み合わせて一語にしたもの（「ひとり日和」「魔法使いクラブ」など）、二語を「の」でつないだ形（「窓の灯」「わたしの彼氏」「あかりの湖畔」など）も目に付く。

同世代の女性作家を見てみると、綿矢りさ（一九八四年生）は、「蹴りたい背中」「夢を与える」「勝手にふるえてろ」「ひらいて」のように、動詞を核にするタイトルが特徴的である。金原ひとみ（一九八三年生）には、「アッシュベイビー」「ＡＭＥＢＩＣ」「オートフィクション」「ＴＲＩＰＴＲＡＰ　トリップ・トラップ」「マザーズ」「マリアージュ・マリアージュ」のように英語やカタカナのタイトルが多い。

近い世代の女性作家には、以下のように長いタイトルの作品が散見される。

津村記久子（一九七八年生）…「君は永遠にそいつらより若い」「アレグリアとは仕事はできない」「まともな家の子供はいない」

本谷有希子（一九七九年生）…「腑抜けども、悲しみの愛を見せろ」「生きているだけで、愛。」「あの子の考えることは変」

また、タイトルが印象的な作家に、

山崎ナオコーラ（一九七八年生）…「人のセックスを笑うな」「浮世でランチ」「カツラ美容室別室」「論理と感性は相反しない」「この世は二人組ではできあがらない」「ニキの屈辱」

がいる。

このように、同世代や近い世代の作家たちのタイトルには、しばしば馴染みのない語彙や、語と語の特異な組み合わせが見られる。読者に違和感を覚えさせ、インパクトを与える工夫だと考えられる。

日常語と詩的言語という区分を用いるなら、青山のタイトルは、詩的言語から最も遠い。青山は意識的に日常語をタイトルに選んでいると思われる。それはタイトルだけでなく、本文の表現に関しても言えることだろう。

［33ページ］

2　こういう大きな災難が起こったときにはまず、実家に電話しようと決めていた　いつか何かしらの災難に遭うことを「予感」している「わたし」は、そのとき動揺するであろう自分の心理状態を落ち着かせるために、自分がとるべき行動をあらかじめ決めておき、いずれ来るそのときに備えている。実家に電話するというが、実家が近くにないとすると、実際の支援、援助を期待しての行動ではないだろう。災難に遭って動揺しているであろう自分に、心理的な安定を与えることとして、実家に電話をかけることが選ばれているのだと考えられる。あるいは実家であることに大きな意味はなく、最初にする行動だけは決めておく、ということなのかもしれない（↓発問）。いずれにせよ、いつの、どのような内容の災難であれ、そのとき即座に連絡することが可能であり、また許されもする相手として、実家の家族が想定されていることは確かである。「わたし」にとって実家がどのような存在かを知る手がかりとなる箇所である。

6　携帯電話を取り出して応答を待つあいだ、立ち上がって目の前の更地をよく見た　実家に電話して応答を待つというあらかじめ決められた手順を踏む中に生まれた空白の時間によって、「わたし」には目の前の状況を冷静に見る余裕が生まれている。

9　家は消えたというより取り壊されただけのようだった　更地をよく見た「わたし」は、土が「マンションの形そのままに露出して」盛り上がっており、共用玄関にあった鉢植えらしい影も見えていることに気づく。その結果、「わたしの家は消えていた」（32・1）、「その家が消えてしまった」（32・3）と繰り返されていた「家」が「消える」という認識は改められる。「わたし」は、家が「消えた」という最初の衝撃を、観察を通じて、相対的には現実的な、穏当な、めったにありそうもないがありえなくはないことへと修正している。この後、本文中に「消える」という語は用いられなくなる。「誰が、いつ取り壊したのか？」、「旅行中に勝手に取り壊したのか？」、「事前の通知はなかったのか？」、「他の住人はどうしたのか？」など、疑問はまだまだ浮かぶだろう。だがこれによって家がなくなったのは何らかの人為的な結果であるらしいとされ、事態は現実的な説明をつけることが可能な範囲へと収束するのである。

12　こんもり　ここでは、まるく盛り上がっているさま。「こんもりした森」のように、茂って奥深いさまをあらわす場合もある。

13　街灯の光の下では定かでないけれど　すでに時刻が遅いことがわかる。暗い中ではっきりとは見えないものの、「わたし」は一定の時間、目の前の更地を観察する。

問　「こういう大きな災難が起こったときにはまず、実家に電話しようと決めていた」（33・2）とあるが、なぜか。

答・最初にする行動だけは決めておくことで、何をしていいかわからず、何もできない状態になることだけは、最低限避けられると思ったから。

・家族の声を聞けば自分が安心するだろうと考えたから。

（解説）　文中に直接の答えがあるわけではないので、経験や推測にもとづき、常識の範囲で考えさせたい。家族や自分で決めているルールなどがあれば生徒に聞き、それを手がかりに類推させてもよい。

問　「携帯電話を取り出して」（33・6）とあるが、本文中に登場する電話機の種類をすべて挙げなさい。

答・携帯電話　…現在の「わたし」が使用。一一〇番、実家にかける。

・固定電話…実家の電話。

・公衆電話…中学生のときの「わたし」が一一〇番にかけた。

（解説）　本作には、三種類の電話機が出てくる。このうち携帯電話と公衆電話は、本文中に単語が出てくる（「携帯電話を取り出して」〔33・6〕、「中学生のときにも公衆電話からかけたことがある」〔34・9〕）。固定電話は、単語としては出てこない。だが「実家に電話しようと決めていたことを思い出した。実家には父と母と父方のおばあちゃんが住んでいる」（33・3）や「実家の電話は誰にもとられない。もしかして実家も畑になっているのかもしれない」（34・6）などの箇所から、「わたし」がかけている先が家族の誰かの電話、特定の個人の携帯電話ではないことがわかる。

問　「家は消えたというより取り壊されただけのようだった」（33・9）とあるが、「わたし」はなぜ「消えた」を「取り壊された」へと改めたのか、説明しなさい。

答・目の前の更地を観察した結果、土がマンションの形そのままに露出して盛り上がっており、共用玄関にあった鉢植えらしい影も見えたから。

（解説）　本作の序盤では、「消える」という単語が繰り返されている。「消えていた」（32・1）、「消えていたのだけれども」（32・2）、「消えてしまった」（32・3）、「消えたのはさすがにこたえた」（32・8）など。「家」と「消えた」という語の組み合わせはショッキングであり、旅行から帰ったらあるはずの家がなくなっているという事態に直面した「わたし」の、その最初の衝撃が端的に表現されている。その後、実家に最初の電話をかけて応答を待つ間に「目の前の更地をよく見た」（33・8）「わたし」は、「家は消えたというより取り壊されただけのようだった」（33・9）という認識を得る。

問　**「応答を待つあいだ」（33・7）とあるが、その時間は、本文ではどこからどこまでか。応答を待っている時間が「携帯電話を取り出して応答を待つあいだ、立ち上がって目の前の更地をよく見た」（33・6）から始まるとして、終わりの一文を答えなさい。**

答　「呼び出し音に畑の気配はどこにもない。」（34・7）

（解説）　「家は消えたというより」（33・9）からはじまる一段落が、まるごと「わたし」が「応答を待つあいだ」の時間であることに気づかせたい。「わたし」は実家に電話をかけることで、「道端に座り込んでぶるぶる震えていた」（32・8）という最初の激しい動揺から立ち直り、「立ち上がって」（33・7）目の前の更地を観察するまでになっている。この「わたし」の変化は、実家に電話をかけることによって生じている。「わたし」が落ち着きを取り戻すために、電話がとられる必要はないようである。「わたし」はあらかじめ自分で決めていたことに従って実家に電話をかけ、それによって最初の激しい動揺から回復する。

電話機

携帯電話が一般に普及するのは一九九〇年代後半である。まず若年層に普及し、現在では高齢者にも普及しつつある。これにともない、公衆電話の設置台数は減少している。また現在、固定電話には「イエデン（家電）」という俗称が与えられている。かつては電話といえば固定電話を指したが、現在では固定電話を区別して呼ぶ語が必要になっているのである。

本作の主人公は、携帯電話から一一〇番にかけている。中学生のときは公衆電話からかけたとある。携帯電話が普及していない時代だったのか、主人公が中学生だったから携帯電話を持っていなかったのか、事情はわからない。また、主人公は父なり母なり祖母なりの、個人の携帯電話にかけるのではなく、実家の固定電話にかけている。父・母・祖母が携帯電話を持っていないのか、持ってはいるが固定電話にかけることを選択したのか、これも事情は不明である。しかしいずれにせよ、この物語は、主人公が自分の携帯電話から実家の固定電話にかけることが不自然ではないという、時代的なリアリティによって支えられている。例えば父なり母なり祖母なりの携帯電話にかけるのではこの物語は成り立たないし、ましてメールやＬＩＮＥでは成り立たないのである。

［34ページ］

2　ひょっとしてここは畑になるのだろうか？　実際、東側の隣の敷地はすでに畑だった　土はマンションの形そのままに露出して盛り上がっている。共用玄関にあった鉢植えも並んでいるようだ。また、隣の敷地が畑だったことから、「家は取り壊されたようだ→そのあとはいま更地になっている→この土地はやがて畑になるのかもしれない」、と「わたし」は推測している。

6　実家の電話は誰にもとられない　「わたし」が最初に電話をかけたとき、電話には誰も出なかった。最初の電話は父と母とおばあちゃんの誰一人出ず、二度目の電話には父と母とおばあちゃんの三人全員が出るのである。電話に誰も出なかったため、このときの「わたし」は、窮状を訴えたり助けを求めたりしてはいない。「わたし」は目の前の更地を観察し、一一〇番にかけるという次の行動へ移っている。派遣されてきた警察官にも一人で応対している。実家に泊まりに行くことは想定もせず、四つ隣の駅前にあるホテルに泊まっていることから、実家は比較的遠くにあると思われる。つまり実家に電話をすることは、助けを求めることを意味していたわけではないと考えられる。「わたし」は電話をすることで、あるいは、何であれあらかじめ決めていた行動をとることで、それがつながらずとも、ぶるぶる震えて道端に座り込んでいる状態から立ち上がるに至るのである。

6　もしかして実家も畑になっているのかもしれない　「わたし」は実家に電話をかけて応答を待つあいだ、まず、家があったはずの場所にひろがる更地を観察している。家の跡地であるらしいその場所は、ひょっとして畑になるのかもしれないと、隣の敷地がすでに畑であることをふまえて「わたし」は推測する。待っても電話が誰にもとられないため、「わたし」はもしかして実家もなくなって畑になっているのかもしれないと、一瞬、想像する。自分の家がなくなって、跡地が畑になるらしいと考えたことからひらめいた連想だろうが、飛躍のある奇妙な想像である。「わたし」が本気で心配していると読む必要はないだろう。

7　目をつむって携帯電話に耳を澄ませてみるけれど　実家に電話をかけて応答を待つあいだ、最初は目の前の更地を観察していた「わたし」だったが、ここでは目をつむって、呼び出し音に耳を澄ませている。視覚を遮断することで聴覚に集中しているようである。外界を観察した後に視覚を遮断し電話をかけるというのは、結末部の二度目の実家への電話の場合も同様である。「わたし」はホテルの「窓辺に立って、かつて家があったと思われる方角をしばし眺め」（35・10）、そして「部屋の灯りを消したあと」（35・12）に実家に電話をかけている。

7　呼び出し音に畑の気配はどこにもない　通常は視覚や嗅覚などで捉えるはずの気配を聴覚で捉えようとしている。直前の「実家も畑になっているのかもしれない」と同じく、「わたし」の奇妙な思考や感覚を味わいたい。

10　旅行から帰ってきたら家がなくなっていて困っている　「わたし」の発話は直接話法の形で示されていないため、細かな言葉遣いはわからないが、どうやら「わたし」は自分の家について「消えた」ではなく「なくなった」と説明したようである。「取り壊されただけのようだった」（33・9）と考えてはいるものの、理由が判然としないので、状況として「なくなった」と言ったのだろうか。

10　訴えるとすぐに住所を聞かれた　本作は、この一一〇番の電話における女性とのやりとり、またこの後すぐ派遣されてやってきた警察官とのやりとりに、直接話法を採用していない。「わたし」が人と会話を交わすのはここが初めてだが、それは直接話法の形では示されていないのである。交番で「名前と年齢と住所と勤務先」（34・15）を紙に記入するときも、ホテルにチェックインするときも、「わたし」は多少の会話を交わしているはずだが、それらはすべて省略されている。結末部で「わたし」が実家に再び電話をかけて父・母・祖母と会話を交わす際の会話には特異な表現が用いられており、そのことも対比して考えたい。

14　警察官はわたしを交番まで連れていき、名前と年齢と住所と勤務先を紙に書かせ、最寄りのビジネスホテルまでの地図をくれた　「それから」（34・14）からはじまる一文は、「わたし」ではなく「警察官」が主語になっている。「わたし」は一貫して受け身である。同じ内容は、例えば「わたしは警察官に連れられて交番に行き、名前と年齢と住所と勤務先を紙に書き、最寄りのビジネスホテルまでの地図をもらった」などと、「わたし」が能動的に行動しているように言い直すことも可能なはずである。ここでは自分の

意思ではないという気持ちを表すかのような書き方がなされている。逆に言うと、本作において「わたし」が能動的にしていることは、電話をかけることだけだとも考えられる。「わたし」は実家に、次いで一一〇番に、そしてもう一度実家に、都合三度、電話をかけている。これらはすべて、「わたし」が自らの意志で行っていることである。

脚問　**「畑の気配」（34・7）とはどのようなものか。**

答　「わたし」の家だけでなく、実家も畑になってしまったと思われる要素。

（解説）　「わたし」が実家に電話をかけると、とりあえず呼び出し音は聞こえた。それならば、建物としての実家は今も存在し、その中にある電話も存在するということになる。もし、呼び出し音がいつもと違っていたり、音量が弱まっていたり、電話が不通になっていたりしたら、それは「実家も畑になってしまった（畑になりかけている）」という想像をかきたてる要素になる。「人の気配」「動物の気配」「魔物の気配」などということはある。「畑の気配」というと、「畑」そのものに命があるように思えるし、耳慣れない、かなり突飛な言い方だ。不条理な出来事に見舞われた「わたし」の現状認識がすこしずつ、ずれ始めていることを匂わせる表現である。「畑」が何らかの悪意をいだき、世界を少しずつ浸食していくかのような不気味な想像もかきたてられる。

問　**「名前と年齢と住所と勤務先を紙に書かせ」（34・15）とあるが、「わたし」の年齢や職業などについてわかることを挙げなさい。**

答　若い女性。会社員であり、勤務先はカジュアルな服装で通勤するような業種、雰囲気、社風の会社ではない。

（解説）　スーツケースに入っているのが「綿のワンピース」（35・9）だということから、女性だと推測される。Tシャツや綿のワンピースについて「会社に着ていけるような服はない」と判断していることから、ややかたい雰囲気の会社で勤務しているとわかる。また実家の両親や祖母とのやりとりや、困った時はまず実家に頼るという態度から、年齢は比較的若いと推測される。

［35ページ］

1　わたしは示されるがままに電車に乗って　ここも受動的な表現が続く。「示されるがままに」は、示された通りにという意味。「が」は、体言・活用語の連体形に付き、下の「ままに」「ごとし」などの内容を示す。

6　まかなえる　「まかなう」は、やりくりする、処置するという意味。

9　Tシャツや綿のワンピースばかりで会社に着ていけるような服はない　「わたし」の年齢や性別、職業等を推測する手がかりとなる箇所である。「わたし」は会社に勤務している。その会社は、カジュアルな服装で通勤するような業種、雰囲気、社風ではないようである。また、実家を頼りにしていることから、「わたし」は若い女性だと考えられる。

12　部屋の灯りを消したあと　時間は夜遅くだと推測される。「街灯の光」（33・13）がともっていることから、「わたし」が最初に実家に電話をかけた時点で既に外は暗かったようである。そこから電車で移動した「わたし」は、ホテルで「明日の出勤」（35・8）のことを考え始めてもいる。もう就寝の時間なのだろう。部屋の灯りを消したのは、これから寝るためだろうか。そう考えると、ここから先は、「わたし」の夢の中のできごとのようでもある。電話口の向こうの声が「三人の誰でもないようで三人全員の声だった」（36・3）という奇妙さも、夢の中のことだとすれば容易に説明がつく。ただし、実家とのやりとりはすべて「わたし」の夢である、家族は実在しない、実家も消えているのだ、というように、想像をひろげていくことは、個人的な読書の楽しみとしてはよくても、授業の中でそのような物語を作ることは避けたい。本作の表現は、夢かもしれないという感触を読者に与える、という程度にとどめられている。その程度を尊重して、電話のやりとりが現実か夢かを問い、いずれかに確定することは避けたい。夢かもしれない、という解釈の余地を残している、と説明するのが適切であろう。

12　もう一度実家に電話した　「わたし」が父なり母なり祖母なりの、個人の携帯電話にかけていない点に注意したい。父・母・祖母が携帯電話を持っているかどうかは不明なので、持っていないから固定電話にかけるのか、持っているが固定電話にかけているかはわからない。いずれにせよ、「わたし」のかける先が特定の家族の携帯電話だと、この物語は成立しない。最初に実家にかけたとき、電話は誰にもとられなかった。このとき「わたし」が「もしかして実家も畑になっているのかもしれない」（34・6）、と家の消失を思い浮かべるのは、電話機が家にあるものだからである。この電話機は、住居としての家、つまり家という場所と結びついている。また、二度目に電話をかけたときに声が混じるという現象が起こり得るのも、それが父・母・祖母の三人が住む実家の電話だからである。「わたし」は特定の誰かに電話をかけたのではなく、実家に、三人の集合体としての実家に電話をかけているのである。声の混淆はそのことを表していると言ってもいい。末尾の言葉も、特定の誰かからというより、実家という一つの集合体の意思によるものとして「わたし」には受け取られるはずである。

14　わたしは帰ってきたら家がなくなっていたことを話した。……それまでに起こったありとあらゆる不運についても話した　今回起こったことだけでなく、「わたし」がこれまでに遭遇したさまざまな不運なできごとが列挙されている。こうした数々の体験は、「わたし」が家がなくなったことを「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった」（32・4）と捉えたことにつながっている。

［36ページ］

3　三人の誰でもないようで三人全員の声だった　現実か夢か、曖昧さを残す表現である。最初に実家に電話をして「目をつむって携帯電話に耳を澄ませてみ」（34・7）たときと同じように、これは外界を観察してから視覚を遮断した「わたし」が聞いた声である。電話口から通常聞こえないような音や声を聞き取ろうとした結果のようでもある。

6　災難に見舞われなくちゃいけないの？　「見舞う」には、①病人や災難にあった人のもとを訪れたり手紙を出したりして、様子をたずねたりなぐさめたりする。慰問する。②好ましくない物や災難がある人に及ぶ、などの意味がある。②は受け身の形で用いることが多く、ここでも②の意味で受け身になっている。

9　贅沢なことを言うんじゃないよ、それはおまえがおまえの人生を生きている証拠じゃないの　「　」（かぎかっこ）がついていないので声の主すら明らかではないが、作品の主題につながる言葉である。「わたし」を突き放すようでもあり、励ますようでもあり、また諭すようでもある。家族からの優しい慰めの言葉を期待して弱音を吐いたのであろう「わたし」は、最初はあっけにとられたのではないか。思いがけない言葉に当惑した「わたし」は、この言葉の意味をよく考えることになるだろう。この言葉については、発言主がどのような意図で言ったかではなく、「わたし」がそれをどのように受け止めたかを考えさせたい。

問　**「それまでに起こったありとあらゆる不運」（36・2）とあるが、本文中に挙げられている「わたし」の身に起きた不運なできごとをすべて挙げなさい。**

答　・帰ってきたら家がなくなっていたこと
・旅先で財布入りのバックをまるごと盗まれたこと
・一昨年ひったくりに遭ったこと
・過去に旅先で二度の置き引き被害に遭ったこと
・交通事故に遭ったこと
・数えきれない忘れものと失くしものをしたこと

（解説）　中学生のときに公衆電話から一一〇番にかけているので、こ

のときにも何かあったのだと思われるが、詳細は不明である。

問　「それまでに起こったありとあらゆる不運」（36・2）とあるが、「わたし」の身に起きた不運なできごとに共通することは何か。

答・突然、思いがけず、自分が所有するものを奪われること。
・予期しない形で、自分の所有するものを失うこと。

（解説）「わたし」が「予感」していた内容を加えて、別の発問にすることも可能である。「わたし」が予感していたのは、以下のような災難に遭うことであった。
・仕事から帰ってきたら家が燃えていること
・仕事から帰ってきたら家が水浸しになっていること
・仕事から帰ってきたら空き巣と鉢合わせすること
「わたし」がこれまでに経験してきた不運、これから起こるであろうと予感している災難は、多くの場合、人によって被害を受けるという形をとるが、それだけではない。「忘れものと失くしもの」も自分の「不運」に数えられていることに注目したい。

問　「わたし」は自分のことを「つぎつぎ災難に見舞われ」（36・6）ると捉えているが、「わたし」が遭った「災難」を本文中から探し、挙げなさい。また、それらに共通する点を考えなさい。

答〈災難〉
・旅行を終えて帰ってくると家がなくなっていた
・旅先でバッグを盗まれた（財布入りのバッグをまるごと置き引き、旅先での三度目の置き引き）
・通帳と印鑑も家と一緒に失くしてしまった
・ひったくりに遭った
・交通事故に遭った
・数えきれない忘れものと失くしものをした
〈共通点〉
・自分がもっている何かを突然失う、奪われるという点。

《板書例》

☆「わたし」が遭った「災難」
・家が消えていた、通帳と印鑑も家と一緒に失くしてしまった
・財布入りのバッグを置き引きされた
（旅先での三度目の置き引き被害）
・ひったくりに遭った
・交通事故
・数えきれない忘れものと失くしもの
→
自分がもっている何かを失うこと

問　「贅沢なことを言うんじゃないよ、それはおまえがおまえの人生を生きている証拠じゃないの」（36・9）とあるが、この言葉を「わたし」はどのように受け止めたのだろうか。

答　「課題４」参照。

問　「それはおまえがおまえの人生を生きている証拠」（36・9）とあるが、「それ」が指す内容を説明しなさい。

答　理不尽とも思われる災難に繰り返し見舞われること。

問　「それはおまえがおまえの人生を生きている証拠」（36・9）とあるが、「生きている証拠」だと自分が感じることを挙げなさい。

答　省略。

青山七恵の小説における〈家族〉

青山七恵の主要なテーマに〈家族〉がある。例えば川端賞を受賞した短篇「かけら」は、父と二人でバスツアーに参加する羽目になった娘の物語である。実家を離れて一人暮らしをしている娘は、たまたま一日父と過ごし、観察する機会を得ることで、父のある部分を発見する。

あるインタビューで、家族をテーマにすることについて問われて、青山は次のように返答している。「―青山さんの小説で、家族は大きなテーマのひとつなのですね。／青山　実家を出て十年以上経つんですが、同じころに家を離れた周りの友だちが、新しい家庭を作って「家族」へ戻っていく姿を見ているところなんです。自分は二十九歳で結婚をしていない。どこにも、どの家族にも属していないという感覚がすごくあるんですね。だからこそ、家族っていうものを外側から見るのは、今しかないのかなっていう思いもあります。切迫感に駆られて書いているわけではないんですけど、自然とそちらに視線が向いてしまうのかもしれないですね。」

（「著者インタビュー　青山七恵『すみれ』」、「文學界」二〇一二年七月号）。

実家を出て一人暮らしをしている自分自身の現状が、家族をテーマにした小説を書く動機になっていると青山は述べている。同じ時期に実家を出た友人たちが結婚することを「「家族」へ戻っていく」と捉えていることも注目される。青山は一人暮らしには「どこにも、どの家族にも属していないという感覚」があるというが、本作の「わたし」の状態はこれに当たると思われる。

◉図版の解説
33ページイラスト　［画家］坂之上正久
34ページ脚注写真２点　［写真提供］ＰＩＸＴＡ

「羅針盤」の解説

課題１　「わたし」の行動と気持ちの変化を、物語の展開に即して整理しよう。

▼課題解決例

	行動	気持ち
(1)	・旅行を終えて帰ってきて家が消えていることに気付く ・道端に座り込む	ショックを受けている 何かが起こる予感はあったが、激しく動揺している ←
(2)	・実家に電話する ・立ち上がって更地を観察する ・一一〇番にかける ・警察官の行動を観察する ・交番で名前等を紙に書く ・電車に乗ってホテルにチェックインする	あらかじめ決めていたことをして、心を落ち着かせようとしている 少し余裕が生じている ← 気をとりなおしている まともな扱いはされないだろうと覚悟していたが、今から警察官を派遣すると言われて安堵している 表面的には落ち着いているようで、感情が麻痺している

・自分の持ち物を確認する ・窓辺に立って家があった方角を眺める	← 一時的に楽観的な気分になったり、今後のことを考えて途方に暮れたりしている ぼんやりしている
(3) ・もう一度実家に電話する	← 自分ばかり災難に見舞われることが理不尽に思えてつらくなっている

【課題設定のねらいと解説】

この課題では、まず、「わたし」の気持ちの変化を大づかみにおさえたい。(1) 最初の激しい動揺から、(2) 少し落ち着き、(3) 最後に感情を爆発させるという変化である。

家が消えるという事態に遭遇した「わたし」は、ショックを受け、道端に座り込んでしまう。そこから態勢を立てなおし、事態に対処しはじめることができたのは、災難が起きたときにはまず実家に電話しようと決めていたことを思い出したためである。電話はとられなかったものの、かけている最中に「わたし」は立ち上がることができている。「わたし」は気をとりなおして一一〇番にかけ、以後、警察官の指示に従って行動していく。ただし、表面的には落ち着いて事態に対処しているように見える「わたし」だが、結末部で再び実家に電話をかけ、父・母・祖母と話す中で、感情があふれ出す。

このように、(1) → (2) → (3) の「わたし」の気持ちの変化には、実家に電話をかけるという行為が深く関与している。逆に言えば、本作において「わたし」が自発的にしている行動は、電話をかけることだけだとも考えられる。物語の展開に即して行動と気持ちの変化を整理するというこの課題のねらいの一つは、実家に電話をかけるという行為の重要性に気付かせることにある。それは「わたし」にとって実家がもつ意味を考える、以後の学びへの布石になっている（「協働的な学びのために」参照）。

以下、(1) ～ (3) の「わたし」の気持ちについて、やや詳しく解説する。(2) に関しては、微細な気持ちの変化を追うことも重要だが、安堵したり楽観したりしていても限定的・一時的なことであり、最初の衝撃から立ちなおっているわけではない点に注意が必要である。

(1) 家が消えるという大きな災難に遭遇した「わたし」は、衝撃を受ける。何かが起こることは予感していたとは言え、「わたし」は激しく動揺し、心にダメージを負う。「気づいたときには道端に座り込んでぶるぶる震えていた」(32・8) という箇所が、「わたし」の衝撃の大きさを表している。

(2) 「わたし」は大きな災難が起こったときにはまず実家に電話しようと決めていたことを思い出す。応答を待つあいだ、「わたし」は立ち上がって目の前の更地を観察し、何があったのか、現実にありうる範囲で推測している。「わたし」はまた、目をつむって電話に耳を澄まし、呼び出し音の気配から実家の様子を想像している。電話はとられなかったが、「わたし」は実家に電話することによって、自分の心を落ち着かせ、気をとりなおすことができている。

気をとりなおした「わたし」は一一〇番にかける。まともな扱いはされないだろうと覚悟していたが、警察はすぐに対応してくれた。「わたし」はやってきた警察官の指示に従い、受動的に行動する。一連の行動の最中の「わたし」の心情は書かれていない。表面的には落ち着いて人と接しているが、深いところでは動揺が続いていると推測される。

ホテルにチェックインした「わたし」は、現在の自分の持ち物を確認して一時的に楽観的な気分になったり、今後のことを心配したりしている。その後は家があった方角を眺めてぼんやりしており、感情の起伏は見られない。

「わたし」は現実的な対策を講じているようで、やはり深いところではいまだ動揺が続いている状態だと考えられる。

(3) 部屋の灯りを消し、再び実家に電話した「わたし」は、電話口の向こうの父・母・祖母に、家がなくなったことやこれまで起こったあらゆる不運を訴え、泣く。家族と話すうちに感情がたかぶってきて、自分ばかりが次々と災難に見舞われるという気持ちになり、つらくなっている。ここで重要なのは、「わたし」が実家との電話でようやく自分の感情を表に出すことができている点である。もう嫌になった、という「わたし」の発言は、言葉通りに受けとる必要はない。こう言いながら、「わたし」は多分明日は出勤し、この生活を続けるだろう。

> **課題２　「わたし」はどのような人物として描かれているか。「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった。」(32・4) という表現や「わたし」の言動を手がかりに、まとめてみよう。**

▼課題解決例

・過去の経験から未来に対して漠然とした不安を抱えて生きている人物。
・悪いことが起こる可能性を予め想定しておくことで、自分を守ろうとしている人物。
・自分を不注意だと捉え、人生に多少の困難を感じつつも、のん気に日々を過ごしてきた人物。

【課題設定のねらいと解説】

課題は、「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった。」という箇所を手がかりにするよう、指定している。この箇所は、本文中に「予感」の語が登場する唯一の箇所である。この課題を通して、本作のタイトルである「予感」についても考えさせたい。

手順としては、まず、作品全体から「わたし」に関する情報を集めて、基本的な設定を理解する。「わたし」は父・母・祖母のいる実家を離れ、マンションの一室を借りて一人暮らしをしていた。家がなくなっても実家に行こうとはしていないことから、実家はある程度離れたところにあると考えられる。また、スーツケースに入っている服から、「わたし」は若い女性だと推測できる。年齢は二十代半ばから後半くらいだろうか。「わたし」は会社に勤めている。Tシャツと綿のワンピースについて、会社に着ていける服ではないと判断していることから、ある程度かたい服装をしていく必要のある職場だと分かる。今回の旅行は海外旅行であろうか。過去に旅先で三度置き引き被害に遭っているということは、それ以上の回数、旅行に行っていると考えられる。旅行が趣味なのかも知れない。このように、確定できない部分も多いが、どのような人物か、まずは具体的にイメージしてみるとよいだろう。

その上で、「いつか、これに似た何かが起こるという予感はあった。」(32・4) の一文を含む段落に改めて注意を向け、「予感」の内容を踏まえて「わたし」の人物像を把握したい。必要に応じて、幾つかの発問を重ねる（「発問」参照）。「わたし」が抱いていた「予感」とは、例えばどのようなものか。「わたし」はなぜそのような「予感」を抱くようになったのか。これらの発問によって、「わたし」が過去の経験を未来に転写するようにして、いつか何か悪いことが起きるのではないかという「予感」を抱いて日々を過ごしていたことが見えてくる。つまり「わたし」は、過去の経験から、未来に対して漠然とした不安を抱いて生きている人物だと考えられる。

では、「わたし」がそのような「予感」をもつのは何のためか。これまで何度も災難に遭ってきた「わたし」は、自分のことを不注意な人間だと考え、これから先も同様に何らかの災難が自分の身に起こるかも知れないという不安を抱えていた。「わたし」はその不安ゆえに、実際に何かが起こる前から何かが起こるかも知れないと予感することで、自らを心理的に防衛しようとしている人物だと考えられる。何か悪いことが起こると考えておくことで、さ

らに、そのときにまず何をするかを決めておくことで、「わたし」はいざ何か悪いことが起きたときに受ける衝撃を少しでも和らげようとしているのだと推測される。

一方で「わたし」は、何度も置き引き被害に遭いながら、懲りずにまた旅行に出かけており、置き引きくらいではもう驚かないというタフさを備えている。置き引き被害に遭うのは、「わたし」が不注意な人間で、過去の失敗から学習しないためだとも言えるが、「わたし」は何らかの災難に見舞われるであろうことを予想しつつも、それによって自分の行動を制限しようとはしていない。漠然とした不安を抱えつつも、根本的には楽天的でのん気な人物なのだと考えられる。

課題３　「もう一度実家に電話した」（35・12）ときに、電話の相手の声が二転三転しているように「わたし」が感じたのはなぜか、考えてみよう。

▼課題解決例

・電話の相手の声が、誰のものかわからなくなりかけているように、「わたし」が現実に対する認識能力を失いかけているから。実際には家は消えておらず、世界はもとのままだったのかもしれない。

・実家の家族さえも、何らかの意図から「わたし」を追い詰めようとしている。「わたし」の世界が根底から覆る予感を醸し出す設定。

・家が畑になっただけでなく、次は実家の家族にも変異がもたらされるかもしれない。電話の声が誰のものかわからなくなってきたのは、その予兆だろう。

【課題設定のねらいと解説】

大きなトラブルに見舞われたとき、多くの人が頼るのは身内である。「わたし」も「こういう大きな災難が起こったときにはまず、実家に電話しようと決めていたことを思い出した」（33・2）というとおり、実家の家族を心のささえにしていた。だが、その家族さえ、おかしくなりかけているのではないか。ホラー映画には、例えば

1　ゾンビから逃げる。
2　家族のもとに逃げ込み、もう安心だと思う。
3　だが、じつは家族もゾンビになっていた！

というパターンが見受けられる。だが、この小説は、そんな王道パターンを裏切る。「わたし」が実家にもう一度電話して、「もしもし？」という応答があった。読者は、先ほどの「2」のシーンと同じように「よかった。安心だ」と思うところだが、そんな平穏のひとときさえ奪い去るように、「苛立しそうに受話器を取ったのは」（35・12）と続き、電話の相手がころころ変わったように思える展開へと移行する。「3」のシーンになったのか、なっていないのか、何の決定打もないまま、小説は思いがけない結末へと向かっていく。この電話のやりとりが、さらに謎が増殖していく雰囲気を生み出している。

課題４　「贅沢な……証拠じゃないの。」（36・9）という言葉を「わたし」はどう受けとめたか。考えよう。

▼課題解決例

・誰しも生きている以上、いいことも悪いことも起こる。「わたし」は家族の言葉によって、これまで自分の身に起きたことは、災難も含めて自分の人生の一部をなしているのだと気付いたのではないか。悪いことだけを数え上げ、それを否定的にしか捉えていなかったことを、「わたし」は反省したのではないか。

・家がなくなったことも、その他の災難も、「わたし」だけに起こること、起こり得ることではない。程度の差こそあれ、誰でも人生の中で何かしらの

災難に遭うものである。「わたし」は家族の言葉によって、自分ばかりが不幸だという気になっていた甘えに気づかされたのではないか。

・「わたし」は自分ばかりが次々に災難に見舞われると感じている。誰しも、他人の災難に対して、自分の災難と同じ程度の強い関心をもつことは難しい。同情することはあっても、関心はいずれ薄れ、忘れてしまう。つまり人は、自分の災難だけを覚えているものである。人が経験できるのは、自分の災難だけだからだ。「わたし」は家族の言葉によって、自分が他ならぬ自分の人生を当事者として生きているということを実感したのではないか。

・「わたし」は家族の言葉によって、災難を含むこれまでのすべてが自分という存在を形作っていることに気づいたのではないか。これから先も「わたし」の身にはまた似たような何かが起こるかも知れない。しかし不安なあまり先のことを予感し心理的に防衛するのではなく、今後の災難もこれまでの災難と同じく自分の人生を形作るものだと考えるなら、少し気が楽になる。家族の言葉によって、「わたし」は励まされたのではないか。

・「わたし」は実家を離れて一人で暮らし、自活している。何度も旅行に行くなど、自分のしたいことを実行してもいる。その中で遭遇するさまざまな不運や災難に、「わたし」は自分で対処してきた。しかし一方で、「わたし」は実家を心理的に頼りにし、何かあったときには弱音を吐くことができるような、心の拠り所にしていた。「わたし」は家族の言葉によって、精神的な自立を促され、ただ事態に対処するだけでなく、自分自身で正面から問題を受け止め、引き受けることが、自分の人生を生きることなのだと悟ったのではないか。

【課題設定のねらいと解説】

この言葉は、「わたし」を突き放すようでもあり、励ますようでもあり、また諭すようでもある。家族からの優しい慰めの言葉を期待して弱音を吐いたのであろう「わたし」は、最初はあっけにとられたのではないか。思いがけない言葉に当惑した「わたし」は、この言葉の意味をよく考えることになるだろう。声の主すら明らかでないこの言葉については、発言主がどのような意図で言ったかではなく、「わたし」がそれをどのように受け止めたかを考えたい。それはこの作品の主題を考えることでもある（「主題についての考察」参照）。

〈協働的な学びのために〉
「わたし」にとって「実家」はどのような存在なのだろうか。グループでお互いの考えを交流しよう。

▼課題解決例

以下のような意見が出されることが想定される。

・日常的に関わりをもっていなくても、何かあったときにはその存在を思い出すことで動揺した自分の心を落ち着かせることができる、心理的な支えとしている存在。

・父・母・祖母といった特定の個人ではなく、その総体としての家族を意味し、自分の感情をさらけ出し、ぶつけることを許容してくれる存在。

【課題設定のねらいと解説】

「わたし」にとって「実家」がもつ意味を考える際、手がかりになるのは、以下の二点である。

一つは、「わたし」が「こういう大きな災難が起こったときにはまず、実家に電話しようと決めていたことを思い出した」という点である。「わたし」は、何らかの災難に見舞われたとき、最初に実家に電話をかけることを決めていた。災難の内容は事前には分からないのだから、電話をかけることが事態の解決につながることを期待しているわけではないだろう。その災難がどのよ

うなものであれ、電話をかけることで、自分が落ち着くであろうことを「わたし」は予想したのだと考えられる。つまり実家とは、「わたし」にとって、実際には助けにならないとしても、心理的な支えになっているものだと言える。

実際、家がなくなるという事態に遭遇した「わたし」は、最初は激しく動揺するが、実家に電話をかけることで道端に座り込んだ状態から立ち上がっている。このときの電話はつながらないが、話をすることができなくても、「わたし」はただ電話をかけることで落ち着きを取り戻しているのである。

もう一つは、結末部の実家への電話で、「わたし」が感情を爆発させている点である。「わたし」はここではじめて自分の感情をさらけ出している。家がなくなったことだけでなく、過去のあらゆる不運について話して泣くという「わたし」の言動は、その口調とあいまって（「でも…だよ」「もういやんなっちゃった」など）、想定される年齢以上に子どもっぽいようにも思われる。だがこれはおそらく家族以外には見せない「わたし」の一面である。「わたし」がこの幼いとも見える泣き言をこぼす相手が、特定の個人ではなく、母であり父でありおばあちゃんであるということにも注意が必要である。「わたし」は家族の誰かではなく、実家に、つまり実家にある固定の電話機にかけているはずである。「わたし」にとって実家とは、特定の個人ではなく、家族の総体であり、おそらくそれは場所と結びついた概念である。そのことは、最初に電話をかけてつながらなかったとき、「実家の電話は誰にもとられない。もしかして実家も畑になっているのかもしれない」と、その場所を想像していることからうかがえる。実家というとき、イメージされているのは、家族という総体であり、それは家屋や土地もともなうのだと考えられる。

探究――考えを深める

次のインタビュー「作家の読書道」をあわせて読んで、これまで読んできた物語や小説の中で、「物語の力」を感じた作品について文章にまとめよう。

▼課題解決例

・佐野洋子『100万回生きたねこ』――何度も生まれ変わり、たくさんの生を体験してきたねこが、真実の愛を知ったとき、ただ一度だけの生を生ききることになる。本当に誰かを大切に思えたとき、私もこんな気持ちになるのかな、と感動した。

・モンゴメリ『赤毛のアン』――愛情に飢えた小さな少女アンが、田舎の村の老兄妹のもとに引き取られる。少女のまっすぐな愛と、人生を前向きにとらえるために発揮する想像力が、周囲の人たちを魅了していく。私も、アンと同じように愛と想像力をもち続けたいと思った。

【課題設定のねらいと解説】

青山七恵は、絵本『ノンタンのたんじょうび』や『そして、トンキーもしんだ』のような、多くの児童に好まれる作品を紹介したあとは、急に大人向けの小説『アムリタ』を取り上げている。ある程度の読書体験を経た子どもは、背伸びをして、大人と同じ本を手にとることがあるのだ。吉本ばななも、『赤毛のアン』も、もともと大人向けの小説だったが、中高生にもたくさん読まれている。生徒には、このインタビューを読んだあとで「何歳だからこの本を、という年齢の枠にとらわれすぎず、なんでも読んでみよう」と呼びかけたい。高校生であれば、絵本や児童書の名作を読み返して、そこに思いがけない意味を見いだすこともできる。大人向けの難しそうな小説であっても、しなやかな感受性で、その世界観を受け入れることもできる。小説に内在する、心を揺さぶる「物語の力」について、考えさせたい。

探究教材　作家の読書道 ……◆青山七恵

◉教材の概要

「予感」の作者である青山七恵が、これまでに読んできた本を振り返るインタビューである。幼少期の思い出、小学校の国語の授業での体験なども交えながら、本から受け取った感動、衝撃を語る。生徒も「自分も、こんな体験をしたことがあったなあ」「この本、読んだことがあるぞ」と親しみをいだきながら読むことができるだろう。これまでの読書を振り返らせるとともに、さらなる読書啓発につながる探求教材である。

◉筆者

青山七恵
※87ページ参照
瀧井朝世（聞き手）
ライター、書評家。一九七〇年、東京都生まれ。著書に『偏愛読書トライアングル』（二〇一七年、新潮社）など。

◉出典

本文は、ウェブサイト「ＷＥＢ本の雑誌」に掲載のコラム「作家の読書道」第二一六回（二〇二〇年三月二八日）によった。

◉語句・文脈の解説

［37ページ］

下11「ノンタン」シリーズ　作・絵ともにキヨノサチコによる絵本シリーズ。元気な猫の男の子「ノンタン」が、子どもらしいさまざまな体験をする。一九七六年に最初の絵本『ノンタンぶらんこのせて』が刊行された。

［38ページ］

下8『そして、トンキーもしんだ』　作、たなべまもる。絵、かじあゆた。一九八二年に刊行された。上野動物園にいた象のトンキーの物語。戦争の恐ろしさ、悲しさを伝える名作として知られている。

［39ページ］

上17『アムリタ』　吉本ばななによる小説。頭を打ってからぼんやりすることが増えた主人公が、妹の死、弟の変化、妹の恋人とのかかわりなどを経て、人生の意味を見いだしていく。

学習指導をさらに深めるために

◉作品解説

「わたし」は自らを「不注意」（32・6）だと考えている。なるほど、置き引き被害や、「旅行を終えて帰ってくると」（32・1）家が消えている、「仕事から帰ってきたら」（32・4）家に被害があるといった「わたし」が体験したり想像したりする災難に共通するのは、何らかの形で自分の注意がそこからそれたときに、その隙に自分が所有するものが損なわれるという構図である。自分の荷物から一瞬目を離すこと、自分の家を一定期間離れて旅行に行くこと、自分の家を離れて出勤することは、時間の長さは違うが、いずれも対象から一定の時間、目を離すことである。つまり「わたし」は、自分が所有するものについて、ずっと注意を払い続けていないと、いつか突然失われるかもしれないという不安を抱えているのだと考えられる。

ところでこれは、「わたし」が「不注意」な人間だからだ、というような問題なのだろうか。自分が所有するものすべてについて、つねに絶え間なく注意し続けることは不可能である。いつ何が対象になるかもわからないのだから。自分が所有するものがいつか突然失われる、損なわれる、奪われるかもしれないという不安は、漠然としていて、そしておそらくかすかなものである。それは失ったときにはじめてあらわになるものなのではないか。

「わたし」が予感していることは、「わたし」が十分に注意深く、用心深くあれば避けられるというようなものではない。結末部で「わたし」は、「どうしてわたしばっかり、こんなにつぎつぎ災難に見舞われなくちゃいけないの？」と家族に問うている。「わたし」の「不注意」をなおせば避けられることなら、それはお前が不注意だからだ、以後注意深く行動するように、と返答すれば済む話である。

生きている限り、何かを失うことは避けられない。人は予感し備えることで衝撃を少しでも和らげようとする。自分の中に原因を求めることも、自分だけが特別に不運だという気になることもある。何かを所有することは、いつかそれを喪失するかもしれないという不安を、潜在的にともなうものである。愛着や喜びもそこにある。

◉教材研究・授業研究のための文献

・『女性文学の現在―貧困・労働・格差』矢澤美佐紀（二〇一六年、菁柿堂）

◉読書指導・発展学習のための文献

・『かけら』青山七恵（二〇一二年、新潮文庫）

第２単元
第２教材

雉始雊

◆絲山秋子

教材採録のねらい

第２単元の能力目標は「解釈の多様性を楽しむ」である。第１教材「予感」は、学習活動のポイントに「物語の展開に伴って疑問が深まっていく過程を読む」を掲げていたが、この「雉始雊」のポイントは「物語の展開に伴って全容が明かされていく過程を味わう」である。謎を謎のままとし、読者のイメージのなかに不思議な世界を出現させる「予感」と違い、「雉始雊」は、結末で読者に「ああ、そういうことだったのか」とつぶやかせる種明かしを用意している。ミステリーとまでは言えないかもしれないが、読者はラストのどんでん返しを楽しみ、満足して本を閉じることができる。

だが、結末がわかったところで、「雉始雊」の魅力が減ずることはない。読み返すことで「じつはここで結末を匂わせていたんだな」と気づかせる箇所が見つかる。それだけでなく、地方でのびのびと暮らす夫婦のやりとりも、動物たちとのかかわりも、自然の厳しさや美しさも、「この作品世界にもう少し浸っていたい」と思わせる魅力をたたえている。「いい小説とは何か」という本質的な問いかけに応えうる内容が、ここにある。

小説に仕掛けられた展開の妙を理解することを入り口にして、さらに奥深い作品理解へつながる道を見いだしていただけることを期待して、この「雉始雊」を教材として採録した。

◉主な学習内容

・登場人物の行動や気持ち、動物や周囲の人とのかかわりを的確に読み取る。特に「わたし」「サネスケ」がどのような人物として描かれているのかを分析する。

・「雉」「コシガヤさん」などが、それぞれ作品内でどのような役割をもっているのかを読み取る。

・結末に向けて、この小説の全容が明らかになってく作品構成を捉える。

・小説に示された事物や出来事が、短歌・俳句ではどのように詠まれているのかを分析し、詩歌の言葉を手がかりにして小説の新たな魅力を掘り起こす。

教材の概要

◉主題についての考察

1　小説の展開・構成

人は「思い込み」の枠の中で周囲を見ている。本教材「雉始雊」は、読者の思い込みを、結末で鮮やかに裏切る構成になっている。ラストで示される作品内事実に、読者は「なんだ、そういうことだったのか」とつぶやき、「そういえば、あそこに、そう思わせるようなことが書いてあった」と、作品のところどころに仕掛けられていた謎に思い当たり、「やられた。騙された」と思う。小説という、読み進める順番が決められている文章表現ならではの仕掛けである。生徒は、ミスリードを誘うように巧みに仕立てられた現代小説の展開・構成を味わい、その面白さを感じ取ることだろう。

2　人を描く、人と人とのかかわりを描く

「わたし」と「サネスケ」は田舎に移住して八年になる。それまでは都会でバリバリ働いていたかもしれない。都会の気ぜわしさを嫌って、地方へ移住したのかもしれない。小説内では、人物それぞれの経歴や背景までは詳しく描かれないが、この夫婦の姿には、さまざまな想像を誘う魅力がある。

絲山作品は、人の真実を描く。人と人（この小説では「人と動物」という側面もある）との多様なかかわりを描出する。夫婦と「コシガヤさん」との淡いつながりも、二人がそれぞれに「ロミオ」を思うやりとりも、興味深く、面白い。一般常識のようなものから少しずれていて、でも、あたたかい。

授業では、この作品にほの見える「ずれ」の面白さ、少し風変わりな人物たちの魅力にも迫りたい。

◉表現の特色

1　一人称小説を装う

多くの読者に「一人称語りの小説だ」と思わせる、「です・ます」調のやさしい語り口。田舎の気候、自然に囲まれた暮らしぶり、動物たちとのかかわりを率直に、だが、どこかあたたかみが伝わるように描き出している。

2　整った言い方より、本音に近い言い方を

夫婦の会話で、本音トークが展開される。日常の話し言葉そのものが正確に文字化される。一人でとんかつを食べに行くときを「みなぎってるとき」（51・2）と言うなど、書き言葉で正しいとされる規範を軽々と飛び越え、人物の本音がほの見える表現を志向している。

3　文化的な話題を読みやすく

二十四節気、七十二候など、伝統文化の話題も、シェイクスピアや桃太郎伝説などの文学の話題も、テンポのいい夫婦の会話の中で取り上げられる。読者の読みやすさを保つため、説明の多くも会話の中に紛れ込ませ、どんな話題もわかりやすく示されている。

◉作者

絲山秋子（いとやまあきこ）

小説家。一九六六（昭和四一）年、東京都生まれ。

新宿高校、早稲田大学政治経済学部経済学科卒業後、住宅設備機器メーカーに入社。二〇〇一年まで、営業職として福岡、名古屋、高崎などへ赴任。療養のため休職。その後、復職、入院、自宅療養へ。入院中に小説を書き始める。

二〇〇三年、「イッツ・オンリー・トーク」で文學界新人賞を受賞。二〇〇四年、「袋小路の男」で川端康成文学賞を受賞。二〇〇五年、「海の仙人」で芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。二〇〇五年、「沖で待つ」で芥川龍之介賞を受賞。

その後、群馬県高崎に完全移住。二〇一六年、『薄情』で谷崎潤一郎賞を受賞し、現在も精力的に執筆活動を展開している。

多くの小説が、高崎市など、地方を舞台としている。どの作品も巧妙に仕立てられており、熱心なファンが多い。伊坂幸太郎など作家仲間からも高い評価が寄せられている。

◉出典

本文は『掌篇歳時記　春夏』（二〇一九年、講談社）によった。

古来伝わる季節の言葉「二十四節気」「七十二候」をもとに現代作家が綴った短編のアンソロジー。絲山以外の執筆者は、瀬戸内寂聴、伊坂幸太郎、花村萬月、村田沙耶香、津村節子、村田喜代子、滝口悠生、橋本治、長嶋有、高樹のぶ子、保坂和志。同趣向の『掌篇歳時記　秋冬』も刊行されている。

学習指導の展開

◉学習目標と評価

教材名	配当時間	教材のねらい	学習活動のポイント
雉始雊	4［読むこと］	読みの広がりを迫う	物語の展開に伴って全容が明かされていく過程を味わう ・〔探究〕 作品のもつモチーフからイメージを広げる

学習指導要領の指導事項		評価の観点	評価方法
知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	観点別評価規準	教材に即した評価の実際
文化イ　人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方を豊かにする読書の意義と効用について理解すること。	読むエ　文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察すること。	知識・技能 ①人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めている。	記述の観察 作品内で人物、動物、自然がどのように描かれているかを的確に捉えている。
		思考・判断・表現 ②文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察している。	記述の観察 作品に仕掛けられた、意外な結末へとつながる構成や展開を、作品全体を見渡した上で理解している。
		主体的に学習に取り組む態度 ③人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めたり、文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察したりすることに向けた、粘り強い取り組みの中で、自らの学習を調整しようとしている。	行動の観察 作品内で書かれている自然環境、地方文化、二十四節気などの伝統文化に興味をもって調べ、それぞれが作品世界を成り立たせるためにどのように機能しているかを考えようとしている。

言語活動例

支援（Bを実現していない生徒への手立ての例）

作品内の人物や自然環境がどのように描かれているか、印象に残った表現を抜き出して感想を述べるよう促す。

作品の結末で何が明らかにされているかを、自らの言葉で説明するよう促す。

気候や季節を表す言葉を抜き出して、それぞれの意味を調べさせる。

◉学習指導展開例　※評価の番号は、「◉学習目標と評価」の番号と対応しています。

時間	目標	学習活動と指導内容	指導上の留意点	評価
第１時限 導入	・本文を読み始め、印象を語り合うことができる。 ・登場人物や動物の印象をまとめることができる。 ・自然を表す表現に注目し、地方での生活について話し合うことができる。	1　第一段まで読み、どんな印象を抱いたかを話し合う。 2〔羅針盤　課題1〕に取り組む。 ●「わたし」「サネスケ」「たぬ吉くん」それぞれの感想を話し合い、ノートにまとめる。 3　作品の舞台となっている地方での生活について、気づいた点を話し合う。 4　本文の第二段以降を読み進める。	・範読してもいいが、生徒の学習状況に応じて、少人数のグループで音読させたり、教室全体で群読させたりしてもよい。途中まで読んだ段階（小説の結末を知らない状態）で、感想を話し合うようにする。 ・人物や動物の描写に注目させる。 ・冬の厳しい寒さ、植物、祭り、山などに注目させる。 ・時間があれば最後まで読み通すとよい。	③ ①
第２時限 展開	・本文を通読し、物語の展開について考察できる。	1〔羅針盤　課題2・3〕に取り組む。 ●結末まで読み通し、率直な感想を話し合い、作品内で何が明らかになったかを自らの言葉で説明する。 2「わたし」「サネスケ」「あなた」の三者が、これからどのようにかかわるだろうかを想像し、話し合う。	・通読しての率直な感想や、結末で明らかになったことを発表させ、生徒の言葉をなるべく多く板書する。黒板にて整理することで、結末に至るまでに、作品のところどころに結末を匂わせる記述が仕掛けられていたことに気づかせる。 ・結末の意味を理解した上で、このあと三者がどのように行動するか、さまざまな可能性を考えさせながら、作品全体を振り返らせる。考えたことをノートやワークシートにまとめさせる。	②

第３時限	第４時限
・小説内に仕掛けられた工夫（俗に言う「伏線」）を取り上げ、それらが作品全体を通してどのような効果を上げているかを考察できる。	・小説と、探究教材の短歌・俳句を読み比べ、感想を話し合うことができる。 ・地域に伝えられた民話を調べ、発表し合い、感想を交流することができる。
まとめ	探究
1〔羅針盤　課題3・協働的な学びのために〕に取り組む。 ●作品全体を通して、気づいたことを話し合う。結末に至るまでに、作品のところどころに仕掛けられた工夫、物語構成の巧みさを捉えるとともに、独自の描写、文末表現などの感想も交流する。 2〔探究　考えを深める①〕に取り組む。 ●動物の様子、自然の中の暮らしぶり、季節を表す言葉など、印象に残ったことを調べ、交流する。	1〔探究　考えを深める②〕に取り組む。 ●「雉」「とんかつ屋さん」「蝋梅」など、小説「雉始雊」に出てきた事柄が、短歌・俳句ではどのように詠まれているかを読み取り、その違いを考え、感想を述べ合う。 2〔コラム〕に取り組む。 ●地域に伝わる民話を調べ、発表し合い、地域の伝統文化について考える。
・話し合いの中で気づいたことをノートやワークシートにまとめさせる。 ・気になった事項について、それぞれ調べさせる。小説の展開を理解した上で、作品世界のどんなところに魅力を感じたかを自由に発表させる。	・詩歌の感想を述べ合うことから、その中の題材が小説内ではどのように描かれていたかを考えさせ、小説全体をさまざまな角度から読み返させる。 ・地域の方から民話の聞き取りができない場合は、図書館やインターネットで、地域の民話について調べるように促す。
②	③　①

教材の解説と研究

◉全体の構成

段落	ページ・行	大　意
第一段	初め～44・9「大雪でしょう。」	**群馬県の平野部で暮らす「わたし」の日常――サネスケ、たぬ吉くん、年明けの寒さなど** 「わたし」は群馬県の平野部で、サネスケ、犬の「たぬ吉くん」と一緒に暮らしている。冬の寒さは厳しいが、蝋梅の花や、道祖神祭の準備を見る楽しみがある。「わたし」は、山並みを見渡しながら、朝の散歩を日課にする。
第二段	44・10「サネスケは」～49・10「出勤は車です。」	**朝食時、「わたし」とサネスケとの語らい――雉「ロミオ」をめぐって** サネスケと朝食を囲む「わたし」。昨夜の地震の話題から、二人は家の裏に住んでいる野生の雉「ロミオ」について考える。今の「ロミオ」は、八年前にここに引っ越してきた当初の「ロミオ」と同じ雉なのか、そもそも雉は飛べるのか、などを話し合う。その後、「わたし」は仕事場へ向かう。
第三段	49・11「仕事が終わると、」～51・10「連帯感が生まれました。」	**夕食時、「わたし」とサネスケとの語らい――「コシガヤさん」をめぐって** 仕事のあと、「わたし」は夕食のために買い物をする。昼に食べたもの、「わたし」がとんかつ屋さんで会った「コシガヤさん」について話し合う。
第四段	51・11「『そういや、」～53・4「調べてみましょうね。」	**「わたし」とサネスケとの語らいの続き――七十二候、二十四節気をめぐって** サネスケが「七十二候で『雉始めて雊く』っていうのがあるんだ。」と言い出す。「わたし」とサネスケは二十四節気や七十二候が旧暦をもとにしていることに気づく。
第五段	53・5「ご両親の」～終わり	**「あなた」への呼びかけ――この文章は「あなた」への手紙** 「わたし」は「あなた」に呼びかける。「あなた」の両親は事故で亡くなった。「わたし」は「あなたのお母さんは仲良しの大事な妹だったので……」とお悔やみを述べる。田舎に来てほしい、一緒に暮らそう、と「あなた」に呼びかける。

◉大意

【二〇〇字】

「わたし」は寒さの厳しい群馬県の平野部で、夫のサネスケ、犬の「たぬ吉くん」と一緒に暮らしている。家の裏には「ロミオ」と名付けた野生の雉がいる。二人は「雉初めて雊く」という言葉をきっかけに七十二候、二十四節気について語り合う。最後に「わたし」は「あなた」に呼びかける。「あなた」の両親は、事故で亡くなった。「わたし」は「あなた」の母の姉だった。「わたし」は、田舎へいらっしゃいと「あなた」を誘う。（一九七字）

【一〇〇字】

「わたし」とサネスケの夫婦は、寒さ厳しい群馬県で暮らしている。二人は、家の裏にいる雉のことなどをのんびり語り合う。「わたし」は、亡くなった姉の子である「あなた」に、田舎で一緒に暮らそうと呼びかける。（九九字）

◉展開図

○「わたし」の語り　一人称小説

第一段　「わたし」の日常

・群馬県の平野部に住む。
・サネスケ、犬の「たぬ吉くん」と一緒に暮らす。
・年明けの厳しい寒さ。バケツの氷。
・年明けの厳しい寒さ。バケツの氷。
・黄色い蝋梅、道祖神祭のやぐら、遠くの山並みを眺める。
（自然を楽しみながら、自分たちのペースで過ごしている。）

第二段　朝食時、サネスケと語らう

・昨夜の地震をきっかけに、野生の雉「ロミオ」を話題にする。
・「ロミオ」は、八年前、ここに引っ越してきた当初の「ロミオ」と同じ雉なのか、そもそも雉は飛べるのか、を考える。
（雉「ロミオ」とのほどよい距離感）

第三段　夕食時、サネスケと語らう

・昼に何を食べたのかを話し合う。
・「わたし」がとんかつ屋さんで見かけた「コシガヤさん」のことを考える。
（「コシガヤさん」とのほどよい距離感）

第四段　サネスケとの語らいの続き

・二人は、七十二候や二十四節気が旧暦をもとにしていると気づく。
（自然を楽しみながら、自分たちのペースで過ごしている。）

○じつは一人称小説ではなく、「わたし」から「あなた」への手紙だった。

第五段　「あなた」への呼びかけ

・「あなた」の両親はおそらく事故で亡くなった。
・「わたし」は「あなたのお母さんは仲良しの大事な妹だったので……」とお悔やみを述べる。
・田舎に来てほしい、一緒に暮らそう、と「あなた」に呼びかける。

◉語句・文脈の解説

［40ページ］

1　東京よりも　この小説は、最後の第五段に至ってようやく、「あなた」（53・5）へ向けた手紙だったことが、読者に伝わる仕掛けとなっている。ここで「東京よりも」というのは、「あなたの住んでいる東京（の近郊）に比べると」の意で、出だしの二文目で、じつは東京にいる「あなた」に向けて書いていることがほのめかされているのだ。だが、ほとんどの読者は「多くの人が住んでいる東京と比べると」という程度の意味だと思い、読み流すだろう。

3　「エスキモーの氷の家・イグルー」　語り手である「わたし」は、寒い冬を乗り切るために、毎朝この言葉を唱える。「寒い」と愚痴をこぼすのではなく、「今の私は、まるでエスキモーのようだ」とユーモラスにとらえ、今の暮らしを肯定しようとしている。「わたし」の、風変わりだが、どこか好感がもてる一面が提示されている。

5　容赦なく　手加減しない。

問　**「サネスケ」（40・4）、「たぬ吉くん」（40・6）とは誰か。**

答　「サネスケ」は同居している夫。「たぬ吉くん」は飼い犬。狸に似ている。

（解説）　ほとんどの読者は、この小説を「一人称語りのストーリー」だと思って読み進める。だから、登場人物などの詳しい説明が入るのは、小説として当然だと了解する。だが、人であるはずの「サネスケ」の説明はあまりなく、飼い犬の「たぬ吉くん」は丁寧に説明されている。「人と動物の扱いの軽重が少し変だなあ」と感じる読者もいるだろうが、まさかこの文章が「手紙」だと見破れる人は少ないだろう。「手紙」であれば、「あなた」（53・5）が会ったことのある「サネスケ」の説明は省かれるのが当然。見たことのない「たぬ吉くん」について詳しく説明するのも当然。初読の際にこの問いを投げかけるなら、「犬についてだけ詳しく説明している。よほどかわいがっているんだろうね」という程度におさえたほうがいい。

脚問　**何を「待ちわびて」（40・6）いるのか。**

答　たぬ吉くんは、庭に出されることを待ちわびている。飲み水が与えられるのを待ちわびている。

（解説）　たぬ吉くんが玄関にいることから。また、「わたし」が庭に出てすぐやることとして「たぬ吉くんの飲み水であるバケツの氷を割ります」（41・2）と書いてあることから判断する。犬を飼った経験のある生徒が「たぬ吉くんが、食事が与えられるのを待ちわびている。なでてもらうのを待ちわびている」と答える場合もあるだろう。寒い朝の様子や、「わたし」と「たぬ吉くん」とのつながりを豊かに読み解こうとしているならば、間違いではない。

［41ページ］

4　石器時代から鉄器時代に進みました　バケツの氷を割る道具をかえたことをユーモラスに語る。「木器時代」（41・5）という造語について説明するところにもユーモアが漂う。「わたし」のユニークな視点を示すとともに、博物館に勤務していることにも触れる。

問　**「石器時代」（41・4）、「鉄器時代」（41・5）という表現から読み取れることをまとめよ。**

答　「わたし」は寒い朝、バケツの氷を割る際に、「鉄ペグ」を使用している。最初は木の棒で、次に石で、そして今は鉄ペグで、というように道具をかえてきた。その変遷の過程を、「わたし」は仕事柄、「石器時代」「鉄器時代」とユーモラスに呼んでいる。

（解説）　「わたし」の学術的な興味関心や、田舎暮らしを独自の視点か

ら面白くとらえている一面が示されている。

［42ページ］

1 いつの間にかなくなっているのが好きです　ここでは「流しに捨てた氷」「庭に捨てた氷」のことを言っている。「わたし」が語る田舎暮らしでは、季節のめぐりにあわせて、いろいろなものが現れては、いつの間にか消えていく。深読みするならば、この箇所は、大いなる自然に寄り添う「わたし」の生き方を端的に表すとともに、小説の終わりに明かされる「大事な妹」（53・6）の死が、「いつの間にかなくなっているの」とは対極にある、大いなる死であることも匂わせている。

8 クリスマスツリーなんかより余程見栄えがいいと思います　東京ではクリスマスのイルミネーションで街が輝く。田舎では年が明けると道祖神祭の準備でにぎわう。ここでも、東京よりも田舎のほうがいいよ、と田舎暮らしを誇る「わたし」の気持ちが表れている。

問　**「わたし」が、寒さのかなり厳しい場所で暮らしていることがわかる部分を抜き出せ。**

答　水が流れながら凍ってしまったことがわかります。（42・14）

（解説）　バケツの水、道路脇の溝の水は、静止した状態なので凍りやすい。だが、溝にたまった水が、さらに下の段の溝に流れる途中で凍ったというのは、寒さがかなり厳しい証拠である。

［43ページ］

1 犬体操　犬のような低い姿勢を保つ運動や、機能回復訓練として老犬の体のあちこちを伸ばしたりすることを「犬体操」と呼ぶこともあるが、ここでは「わたし」が犬（たぬ吉くん）とともに散歩しながら行う体操のこと。紐を持ち替えたり、犬の行動によって動かす体の部位を決めたりする。

15 わたしたち姉妹が大好きだったケーキ　ここで「大事な妹」（53・6）のことが出てくる。「あなた」宛ての手紙だと、読者に気づかれないように、あくまでさりげなく触れられる。普通の手紙なら「亡くなった妹にも、この山を見せてあげたかった」などと書かれるだろう。だが、その妹の死が唐突だったり、むごたらしい死に方だったりしたら、悲しみを再びかきたてないように、このようにさりげなく触れるだけで終わらせるだろう。

問　**「わたし」が、自分の住む地域を愛していることがわかる部分を抜き出せ。**

答　浅間山は軽井沢よりも、こちら側から見るのがかっこいいのです。（43・12）

（解説）　「あなた」の住む東京と比べるだけでなく、避暑地として有名な軽井沢と比べても、「わたし」の住む地域のほうが、もっといいのだと主張している。

［44ページ］

3 一心不乱　心を乱すことなく、ただひたすら一つのことに集中すること。

3 気が済んだということみたいです　犬体操のやり方だけでなく、散歩する距離も「たぬ吉くん」によって決められている。ここまで歩いてきて、「たぬ吉くん」は「たっぷり歩いた。もうこれで満足した。帰ろう」と思ったのだろう。

4 折り返せば　散歩の「行き」でも山々を眺めて歩いてきたが、「帰り」でも山並みを眺めている。見渡しのいい、広々とした場所であることがわかる。結末を知った上で再読すれば、「あなた」（53・5）に少しでも田舎暮らしに興味をもってもらいたいという気持ちが感じられるだろう。

12 雑炊のひと。パンのひと。　夫婦二人の暮らしで、食事の支度も簡素化している。ご飯はまとめて炊き、小分けにしてラップで包んで冷凍しておく

のだろう。食パンなども、スライスしたものをラップで包んで冷凍しておくと、二、三週間は食べられる。冷凍ごはんは電子レンジであたため、だし汁とまぜて雑炊にできる。冷凍パンはトースターで焼けば食べられる。サネスケは「朝ごはんはベーコンエッグとサラダだよ。それに加えて雑炊が食べたい？　それともパンにする？」と聞いているのだ。まるで小学校の教室で「この意見に賛成の人、手を上げて」と呼びかけているような雰囲気である。

問　**「わたし」が、自分の住む地域の暮らしやすさを、それとなくアピールしている部分を抜き出せ。**

答　この辺りではそんなに雪は降りません。降る回数としては東京と同じくらいです。（44・1）

（解説）　「わたし」が、自分の住む地域への愛着を語るだけでなく、暮らしやすさについて東京と比較していることが、はっきりわかるところ。この文章は、「あなた」（53・5）を田舎へ呼び寄せるための手紙だから、寒さが厳しいと言いすぎたぶん、ここで「暮らしやすいよ」とアピールしたのだろう。

問　**「冷凍ごはんが一つしかなかった。」（44・12）という言葉から何がわかるか。**

（例）

答　・二人暮らしで、食事の支度などを簡素化している。
・ご飯は一度にたくさん炊いて、小分けにして冷凍し、必要なときに解凍して食べている。

（解説）　初読の際は、ここで暮らす二人が夫婦だとは示されない。若い恋人同士だと読み取る読者もいるだろう。だが、この二人が何でも話し合い、家事も対等に分担し、助け合って暮らしていることが読み取れればいい。

［45ページ］

14 ロミオ　イタリアの男子の名。この直後、本文で示されるように、シェイクスピアの戯曲『ロミオとジュリエット』にちなんでいる。「サネスケ」「ロミオ」「コシガヤさん」など、この作品では、カタカナ表記の名が多い。雉も人も、同じ重みを付与して描かれている、と言っては大げさかもしれないが、描かれる対象の重み付けに、「わたし」の独自のセンスがあるように思われる。

問　**「わたし」と「サネスケ」の二人暮らしは、どのようなものか。**

（例）

答　・寒さの厳しい自然環境で、季節の移ろいを感じながら暮らしている。（第一段から）
・家事を分担し、助け合って生きている。（第二段の最初のほうから）
・二人でいても、それぞれのペースをくずさず、自分らしく暮らしている。（45ページ6～13行あたり。「わたし」が地震に気づかなかったことから。）

［46ページ］

4 シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を知っていますか。　「わたし」の世代（仮に作者、絲山秋子と同世代だとすると、二〇二三年には五十代後半）では、シェイクスピアの代表作は世間の常識である。悲劇の恋人たちといえば「ロミオとジュリエット」。舞台は十四世紀のイタリア、ヴェローナ。モンタギュー家の一人息子ロミオと、キャピュレット家のジュリエットは、互いに惹かれ合う。だが、それぞれの家は代々対立しており、二人の交際は許されないものだった。この悲劇は、マンガやアニメでも、

繰り返しパロディーにされるほど知られていた。だが、今の子どもたちには、どれくらい知られているだろう。ここで、「大人が子どもに向けて語りかけているようだな」と気づく読者がいるかもしれない。

12 雉の寿命　各種図鑑を調べると、雉の寿命は十年ほど。雉は個体を追跡するのが難しいが、詳しく調査したら二十年ほど生きるものもいる、と言われている。45ページに至って初めて、タイトルにもなっている「雉」が出てくる。だが、まず話題になるのは、その寿命である。結末で、命の重みを読者に突き付ける小説としては、納得の展開だろう。また、雉の寿命をめぐって、「わたし」と「サネスケ」が田舎に引っ越したのが八年前だと語られる。「あなた」（53・5）は「来年から田舎の中学校に通ってみてもいいなと思ったら」と呼びかけられているが、この手紙が書かれた時点（作品内の時間）では、おそらく小学生という設定だ。伯母さん夫婦が田舎に引っ越したときには、まだ物心がついていなかっただろう。

問　**「ロミオ」の特徴をまとめよ。**

答・「わたし」の家の裏に住んでいる野生の雄の雉。
・地震が来ると、揺れる前に「キキーッ、キキーッ」と、警戒の声で鳴く。
・春先になると、寝室の窓の下で求婚の歌を歌う（雌を求めて鳴く）ことから「ロミオ」と呼ばれるようになった。
・このロミオは「わたし」がこの地に引っ越して以来、八年間、同じように家の裏に住んでいるのだろうと思われる。

（解説）　46ページを読み返すと、おおよそがわかる。

［48ページ］

6 名前つけた動物は食べられないんだよ。　「わたし」にとって、名前をつけた「ロミオ」は、親しい友だちのようなもの。食べたくない。自分の思いを、まるで世間一般で通用する真理であるかのように主張している。「サネスケ」は、「わたし」の気持ちは知りつつ、本音トークを楽しむために、わざとからかうように「いざとなったら食うよ俺は」と答えている。このあとの会話は、桃太郎の話、「内なる鬼」、雉は飛べるか飛べないか、とさまざまに発展していく。二人の仲の良さ、おしゃべりの面白さを印象付けるくだりである。会話の途中で、サネスケの親しみやすい外見にも触れている。

問　**「内なる鬼」（48・11）とは何か。**

答　昔話「桃太郎」では、桃太郎が、犬と猿と雉を仲間に加え鬼退治に出かける。だが、途中で食料が尽きたら、桃太郎が仲間を食うことになるかもしれない。いざとなったときに、心の奥底にある欲求が現れる。それをサネスケは「内なる鬼」と呼んでいる。

［49ページ］

8 仕事に出かけなければならない時間　ここまでの軽快な会話は、朝食の席で展開された。最初から第二段までが朝の場面。第三段と第四段が夜の場面。この小説は、前半が朝、後半が夜。一編を通して、夫婦のなにげない一日が語られる構成になっている。

13 空っ風　雨や雪を伴わない、乾燥した寒風。冬季の強風。

問　**この小説を大きく三つに分けると、どうなるか。**

答　1　朝の場面（第一段と第二段）
2　夜の場面（第三段と第四段）
3　結び（第五段）

（解説）　さらに詳しく読み解こうとすると、
第一段　朝の場面　自然の話題……冬の気候など
第二段　朝の場面　ロミオ（動物）の話題
第三段　夜の場面　コシガヤさん（人）の話題
第四段　夜の場面　自然の話題……七十二候、二十四節気
第五段　結び
という構成が見て取れる。一と四、二と三が、それぞれ対比されている、と分析することもできる。だが、この一編は「あなた」へ向けた手紙という設定で書かれている。理屈を当てはめて、小説を味わう喜びを損なうことはせずに、「朝の場面も、夜の場面も描かれていて、二人の一日が自然にわかるようになっている」と確認できればいい。

［50ページ］

9 映画祭のボランティア　地方では、町おこしのイベントとして映画祭が企画されることがある。町の中でも、博物館勤務の「わたし」と、設計士の「サネスケ」は、「文化的なことがらに興味のある人、詳しい人」だと認識されているのだろう。映画祭の運営に加わるよう、周囲からお願いされたのかもしれない。同じくボランティアをしていた「コシガヤさん」も、文化的なことがらに詳しい人、「わたし」と話が合いそうな人だと容易に想像できるだろう。

問　**「豚汁に挨拶してるみたい」（50・14）とはどういうことか。**

答　「コシガヤさん」は「わたし」に気づき、軽く頭を下げた。ちょうど豚汁の蓋を開けたときだったので、豚汁に向かって頭を下げているように見えた、ということ。

［51ページ］

2 みなぎってる　「みなぎる」は、みちあふれること。「気力がみなぎっている」などと使うべきだが、話の流れで「気力が」はなくても意味が通る。省略を好む、若者言葉に通じる用法だろう。ここでは「気力がみなぎっていたり、何かに立ち向かわなければと気を張っていたりする状態」という意になるだろう。

9 不思議な連帯感　「わたし」は「コシガヤさん」と目を合わせただけで、「何かあったの？」とうるさく聞いたりしなかった。人と人は、ときに言葉を交わさなくても通じることがある。人とほどよい距離をとれる「わたし」の人柄の良さが感じられる。この手紙を読む「あなた」（53・5）も、「わたし」を好ましく思うだろう。

11 七十二候　このあとに出てくる「二十四節気」とともに、季節の節目を表す言葉。この小説は、もともと『掌篇歳時記　春夏』（二〇一九、講談社）という、七十二候や二十四節気をテーマにした短編小説アンソロジーのために書かれた。絲山秋子が担当することになったテーマが「雉始雊」だったわけである。

問　**「みなぎってる」（51・2）とはどのような気持ちを表しているか。この言葉の説明になっている部分を抜き出せ。**

答・なにかを吹っ切りたいとか、希望を見いだしたいという強い気持ち（51・7）
・気合いを入れたい　（51・8）

［52ページ］

1 二十四節気　季節を表す言葉。一年を春夏秋冬の四つに分け、それをさらに六分したもの。

10 旧暦　太陰太陽暦のこと。江戸時代まで用いられていた。二〇二三年四月一日は、旧暦では二月十一日である。

問　**「明け方の求婚の鳴き方とは違う」（52・15）というのは、どのよう**

な鳴き方か。説明してある部分を抜き出せ。

答　地震が来ると、揺れる前に「キキーッ、キキーッ」と、警戒の声で鳴きます。（46・1）

（解説）「わたし」は、ロミオの鳴き方をきちんと聞き分けている。人も動物も、同じ時を生きている仲間だととらえる「わたし」のあたたかさが、さりげなく示されている。

［53ページ］

5　ご両親の事故のこと　どのような事故なのかは明かされない。だが、ひどい事故だったことだけは、しっかり伝わる。第五段、小説のラストに、ようやく真相が明かされる。この文章は、一人称語りの小説ではなく、「あなた」へ向けて書かれた手紙だった。「わたし」の妹の子が「あなた」である。「あなた」の両親は、大きな事故により、二人とも亡くなった。（母親だけが死に、父親が生き残ったのであれば、「わたし」が「あなた」を引き取ることまでは考えなかっただろうから）。最初に「拝啓」などの頭語が置かれていないのは、「わたし」が「今日、この手紙を持っていく」（53・8）からである。「あなた」を心配している様子から、「わたし」が「あなた」に会いに行くのは、「ご両親」の葬儀に参列するためなのだろう。「あなた」が今後のことを心配しなくてすむように、お葬式で会った時に、そっと手紙を渡しておきたい。辛い気持ちが少しでも軽くなるように、田舎暮らしの良さ、面白さをさりげなく伝えたい。悲しい事故のことをくどくど書かずに済ませた伯母の優しさがにじむ。

問　第五段になって明かされる真相を簡潔にまとめよ。

（例）

答・この文章は一人称語りの小説ではなく、「わたし」から「あなた」へ向けた手紙（という仕掛け）だった。

・「わたし」は「あなた」の伯母であり、両親を亡くした「あなた」を引き取ろうとしている。

（解説）生徒たちは「この小説は手紙だった」と簡単にまとめたがるだろう。正確に言うと、この文章は「手紙の形式を借りた小説」である。小説はあくまでも小説なのだ。だが、正確な説明を施して、生徒の理解を妨げてはいけない。生徒たちに伝わりやすい言葉で、この小説の仕掛け、企みを語るといい。

◉図版の解説

イグルー　［写真提供］PIXTA
バケツ　［画家］ヒロミチイト
蝋梅　［写真提供］PIXTA
道祖神　［写真提供］PIXTA
フランクフルタークランツ　［写真提供］PIXTA
雉　［画家］ヒロミチイト
海南鶏飯　［写真提供］PIXTA

「羅針盤」の解説

課題１　「わたし」と「サネスケ」はどのような人物として描かれているか。簡潔にまとめよう。

▼課題解決例

「わたし」について

①田舎暮らしを楽しもうとしている。ユーモア精神をもっている。
②動物を愛している。
③人の気持ちを思いやることができる。

「サネスケ」について

①家事を上手にこなし、田舎暮らしを楽しもうとしている。
②もの知りで、知的な会話を楽しめる。

【課題設定のねらいと解説】

「わたし」について

①自分の家を「エスキモーの氷の家・イグルー」（40・3）と呼ぶことなどから。
②「たぬ吉くん」を大切に育てている（41・2）、雉の「ロミオ」を食べたくないと思う（48・6）ことなどから。
③とんかつ屋で会った「コシガヤさん」の心中を思いやる（51・8）ことなどから。

「サネスケ」について

①食事の支度を担当しており（44・10～）、しかも手慣れた様子であることなどから。
②「ロミオ」（45・14～）や、七十二候（51・11～）についての会話から。

※この小説は、「あなた」に向けて、田舎への移住を促すために書かれた手紙（という形式をとったもの）である。そのため、主要人物の明るい面が描かれることになる。「わたし」も「サネスケ」も、のんびりと自分のペースを保って暮らしており、田舎の自然環境から喜びを見いだしている。二人の、気どらず、無理せず、あたたかみがあり、ほどよく面白い、そんな日々を、ありのままに綴ろうという意図から書かれた手紙。授業では、夫婦二人の日常の喜び、自然に寄り添う豊かさが読み取れるように促したい。

課題２　「わたし」や「サネスケ」にとって、「雉」はどのような意味をもっているのだろうか。話し合おう。

▼課題解決例

・家の裏に住んでいる雉「ロミオ」に、「わたし」は親しみを感じてきた。
・「わたし」と「サネスケ」にとって、ロミオは、二〇一一年の震災をともに乗り越えてきた同士のような存在。
・夫婦にとって、身近にいる雉は、季節のめぐりを真っ先に教えてくれ、地震の際に鳴いては注意を促してくれる、生活のガイド役である。

【課題設定のねらいと解説】

本文を丁寧に読み解くことから、夫婦と「ロミオ」との関係が次第に明らかになる。夫婦にとって「ロミオ」は、思い切って田舎に引っ越してきてから、ずっと近くにいてくれた大切な存在である。八年間をともに過ごしてきた仲間と言ってもいい。

この小説で、夫婦の他に出てくる主要な人物・動物といえば、次の三者だ。

・たぬ吉くん
・ロミオ
・コシガヤさん

このうち「たぬ吉くん」は家族の一員として、最初に登場する。「あなた」

にも「たぬ吉くん」を好きになってもらいたいという「わたし」の思いがあるせいか、その容姿、散歩や食事の様子など、詳しく描かれている。

家族以外の存在では、「ロミオ」と「コシガヤさん」が、対比的に描かれている。

ロミオ

・動物（雉）
・「わたし」の家のすぐ近くにいる。
・鳴く（地震のときに鳴いていた）。
・季節のめぐりを知らせる存在。
・「わたし」は、「ロミオ」を食べたくない、と強く思っている。

コシガヤさん

・人物
・「わたし」たち夫婦とは、時々会う。
・小説内では話していない。
・季節のめぐりとかかわりがあるかどうかは不明。
・「わたし」は、「コシガヤさん」とほどよく距離をとっている。

このように考えると、「たぬ吉くん」や「ロミオ」を身近に感じ、知人とはほどよく距離をとるという、「わたし」の独自の感性が読み取れる。都市部に住む人にとっては、動物よりも人間に愛着を覚えることが多いだろうから。

だが、この小説の中で、作品の構造上重要な点は、夫婦が「ロミオ」をどう思っていたか、ではない。

手紙の読者である「あなた」が動物好きだったとしたら、やはり動物のことをたくさん書きたくなるだろう。「あなた」が両親を失ったばかりで、急に明らかになってきた人間関係のあれこれに疲れているようだったら、田舎で人と距離をとって自由に暮らしている姿を手紙に書こうとするだろう。

「わたし」の独自の感性を描くというより、「わたし」のものの見方、ものごとの受けとめ方を通じて、この文章の読者となる「あなた」の現状が少しだけ見えてくる、そんな構成になっているのだ。

長い手紙を読んだ「あなた」は、つらい現実をひととき忘れることができたかもしれない。「あなた」にとっては、「ロミオ」が、伯母と伯父の田舎暮らしを象徴する存在に思えたかもしれない。

課題３　物語の進行に伴って、この小説の全容がしだいに明らかになっていく過程を、箇条書きにして整理しよう。

▼課題解決例

この文章が「あなたへ向けて書かれた手紙である」とほのめかしてある部分を書き出すと、次のようになる。

①冒頭の一文から「です・ます」の文体になっている。――手紙のフォームである「拝啓」などの頭語はないが、それは直接「あなた」に「手紙を持っていく」（53・8）からである。

②「サネスケ」がどんな人なのか説明しない。――「サネスケ」は40ページ4行目に登場する。「たぬ吉くん」についてはどんな犬なのか詳しく書いているのに、「サネスケ」については何の説明もない。親戚である「あなた」は当然「サネスケ」のことを知っているだろうから、説明を省いたのだ。一方、小説の読者は「サネスケとは犬か？　人か？」と疑問をかかえたまま読み進めることになる。

③自然のめぐり、地元の祭りなど、田舎暮らしの良さが強調されている。――冬の寒さを綴ったあとで、42ページ3行目あたりから、田舎生活の良さが描かれる。「あなた」を田舎へと誘う手紙としては当然だろう。

④唐突に「わたしたち姉妹が大好きだったケーキ」（43・15）と、「姉妹」が出てくる。――一人称小説だとしたら、「姉妹」が誰を指すのかを明らかにするだろう。「わたし」の妹は「あなた」がよく知っている人であるため、ここでは何も説明しないのである。

⑤シェイクスピアを知っているか、と問う。――唐突に「シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を知っていますか。」（46・4）という問いかけが挿入される。ここで読者は、筆者（語り手）である「わたし」が、年下の人に向けて語っているのでは、と思うだろう。

⑥暦の言葉を知っているでしょう、と問う。――「春分とか夏至という言葉なら聞いたことがあるでしょう？」（51・14）という問いかけによって、読者は「シェイクスピアのところでも問いかけていたなあ。一人称小説とはちょっと違うのかな？」と薄々気づくかもしれない。

⑦七十二候について「一緒に調べてみましょうね」（53・4）と呼びかける。――「この文章は、特定の人に向けて書かれたものだ」とはっきり示している。この次の行で、これが手紙だと判明する。

【課題設定のねらいと解説】

若い読者には「伏線」と説明するといい。ドラマ、映画、漫画も、「伏線が張ってある」「伏線が回収される」などと評されることがある。「課題解決例」に示した箇所は、どれも伏線となっている。「この文章は手紙だったのだ」とわかったあとで、「そういえば『姉妹』と書いてあった！」とハッとする。

小説家は、「一人称小説としては少し不自然だ」「誰かに向けて語っているような口調だ」と読者に思われるような記述を、わざと仕込んでいる。見事な伏線である。授業では、結末に驚いて終わり、ではなく、「そういえば、ここでこう書いてあった！」という、伏線を発見する喜びを体験させたい。

〈協働的な学びのために〉

「です・ます」という文体は、この小説にどのような効果をもたらしているだろうか。常体や方言などの場合と比べながら、グループで話し合おう。

▼課題解決例

話し合いの際に想定される意見

・「です・ます」という文末のおかげで、親しく語りかけているような文体になっている。
・語り手の優しい人柄が感じられる。
・田舎の、のんびりとしたあたたかい暮らしぶりが、文体からも伝わってくる。
・結末で、この文章が手紙であることが明かされ、「だから、です・ます体だったのか」と納得した。
・結末を知った上で考えてみると、東京にいるであろう「あなた」にとっては、方言で書かれた手紙よりも、「です・ます」体で書かれた手紙のほうが、読みやすかっただろう。

【課題設定のねらいと解説】

多くの読者が、「雉始雊」を「一人称で語られる一般小説だ」と思って読み進めていくだろう。近年、若い世代向けの、読みやすく親しみやすい一人称小説が目立つようになり、「だ・である」という常体ではなく、「です・ます」という口語敬体で書かれた小説は珍しくなくなっている。結末で「この文章は手紙文だったのか」と驚いたあとで、もう一度読み返すと、本教材の、ぬくもりのある文体は「手紙文としての口語敬体」だったのだとわかる。

登場人物に寄り添って考察すると、両親を亡くし、悲しみの底にいる「あなた」を励ますため、書き手「わたし」は、のんびり、のほほんとした、あたたかみのある文章を心がけたのだろう、と思われる。時おり挿入される問いかけは、読者へではなく、「あなた」へ向けられたものだった。

あたたかみを生み出すため、方言を取り入れて手紙を書くというやり方もあっただろうが、移住して八年たっただけで、その地方の言葉を使って微妙なニュアンスまで伝えられるようにはならないだろうし、東京方面にいる「あ

なた」にとっては、書き言葉として示された方言は読みにくく、自分を排除しているように感じられるかもしれない。手紙文としては「です・ます」という敬体を選択することがいちばん自然だった、と言えるだろう。

> 探究――考えを深める
> ①「二十四節気」「七十二候」について調べ、あなたの気になった言葉の由来を短い文章にまとめよう。

▼課題解決例

・立夏（りっか）――二十四節気

調べたこと

立夏は、二十四節気の一つ。五月五日頃を、「今日から夏になる」「この日から夏の兆しが見えてくる」という意味で「立夏」と呼ぶ。期間を指す場合、二〇二三年では、五月六日からの二週間となる。次の節気「小満」の前日までが「立夏」の期間である。暦の上では、八月初旬の「立秋」になるまでが「夏」である。

言葉の由来

俳句で用いられる季語「立夏」の小季語として「夏立つ」、「夏に入る」、「夏来る」などがある。季節のはじまりを「夏になる」ではなく「夏立つ」というのは、「立つ」という動詞に、変化する、新たな状態がだんだん盛んになる、などの意味があるからである。二十四節気では、他の季節のはじまりも「立冬」「立春」「立秋」と言う。

五月五日頃は、まだ肌寒い時もあり、とても「夏が来た」とは思えないが、暦の上で「立夏」を迎えたことで、目の前の情景がみずみずしく明るく見えるようになり、本当の夏を迎える心構えができる。

・蛙始鳴（かわずはじめてなく）――七十二候

調べたこと

二十四節気「立夏」をさらに三つの時期に分けると、初候（三つにわけたうちの最初の期間）が「蛙始鳴」となる。二〇二三年では、五月六日から五月十日である。野や田畑で蛙が鳴き始める頃、という意味。

言葉の由来

蛙の声が聞こえるようになると、野山の草木も青く輝き、本格的な夏の訪れが近いことを感じさせる。蛙は、たとえ別の場所に移動しても、必ずもとの生まれた場所に戻る習性があることから、「帰る」の意味で「カエル」と呼ばれるようになった。この時期は、まだ鳴き始めだが、盛夏の頃になると、夜は蛙の大合唱が聞こえるようになる。変化の兆しをとらえた季語でもある。

【課題設定のねらいと解説】

本教材「雉始雊」では、田舎の自然環境の中でのんびり暮らす「わたし」と「サネスケ」の日常が描かれている。彼らが七十二候の「雉始めて雊く」（51・11）を話題にするなど、季節の言葉と、田舎の生活実感とを合わせて考察する場面を読んだあとで、二十四節気、七十二候の言葉について調べることは重要だ。まるで小説中の「わたし」になったつもりで、「この時期、外の様子はどうなっているだろう」と想像をめぐらせながら調べ、昔から受け継がれてきた季節の言葉に親しませたい。

> 探究――考えを深める
> ②この小説で描かれている風景、人間関係、食べ物などと、次の「近・現代の短歌」「近・現代の俳句」での詠まれ方との相違について話し合ってみよう。

▼課題解決例

話し合いの際に想定される意見

・小説「雉始雊」では、「ロミオ」は家の裏に住んでいる野生の雉だが、石川不二子の短歌では、農場で飼われている雉が詠まれたのではないか。

・小説「雉始雊」では、人が何かつらい思いをしていたり、頑張ろうとしていたりするときに行く場所として「とんかつ屋」が描かれている。佐藤弓生の短歌でも、とんかつ屋さんで待つ人の思いが詠まれていて、誰かを思うときの気持ちのたかぶりが感じられる。

【課題設定のねらいと解説】

探究教材として採録された四首、四句には、小説「雉始雊」の中に出て来るさまざまな題材が、形を変えて詠まれている。

・石川不二子の短歌――「雉」。小説の中には雉の「ロミオ」が出てくる。

・春日井建の短歌――「一夜」「立夏」。小説では、夫婦が語らう夜、自宅に持ち帰った仕事に取り組む深夜が描かれている。また、「二十四節気」に触れられているため、その一例として「立夏」が詠まれている歌を掲載した。

・佐藤弓生の短歌――「とんかつ屋さん」。小説では、「わたし」が「コシガヤさん」と会った場所としてとんかつ屋が描かれている。

・服部真里子の短歌――「草原」「風」「あなたが行けと言うなら行こう」。小説では、散歩するときに見る景色や、「空っ風」（49・13）が出てくる。また、小説の結末で、両親を亡くした子が「よかったら一度、遊びにいらっしゃい」と伯母から誘われていることがわかるため、その状況を思わせる歌を掲載した。

・正岡子規の俳句――「田舎の家」。小説では、田舎の夫婦二人暮らしの家の様子が描かれている。

・対馬康子の俳句――「夫婦の夜」。小説では、夫婦で語らう夜の場面が描かれている。

・高柳克弘の俳句――「亡き友」。小説の中で「わたし」は妹のことを「仲良しの大事な妹」（53・6）と言っている。

・山田みづえの俳句――「臘梅」。小説の中に、「黄色い蝋梅がたくさん咲きました」（42・3）という記述がある。

小説「雉始雊」を読んだあとで、対馬康子の俳句を読むと、「氷菓の中に匙」を残したのは、「わたし」と「サネスケ」がのんびりと語らった夜のように感じられるかもしれない。小説の中に描かれているのは、夫婦の冬の場面だけだが、この句によって「この夫婦は夏になったら一緒にアイスを食べたりするんだろうな」と想像が膨らむだろう。

だが、もっと深読みすると、小説の「わたし」と「サネスケ」は、「あなた」を迎えるにあたって、二人で深刻な話し合いをしたかもしれない。自分のペースを守って気ままに暮らしてきた二人にとって、「あなた」を引き取るのは決して簡単なことではないはずだ。そう考えると、対馬の句で「匙残し」と詠まれていることに、何か不穏なイメージが生まれる。

小説と詩歌。同じような題材を描いていても、それぞれ、雰囲気は全く違っている。それでも、この小説に、これらの詩歌を組み合わせて提示するのは、読み比べによって、思いがけない解釈や、新たな作品世界が、読者の胸の中に生まれることを期待しているからだ。

小説の読みを深め、感想交流を盛んにするためにも、これらの詩歌は大きな意味をもつだろう。

探究教材　近・現代の短歌……◆石川不二子　他
近・現代の俳句……◆正岡子規　他

◉教材の概要

小説「雉始雊」の作品世界をより深く味わうために、小説内に出てきたさまざまな出来事、情景などが詠まれている短歌・俳句を、探究教材として採録した。小説と詩歌を読み比べることで、相互の読解の幅を広げ、読者一人ひとりが作品に仕組まれた世界観を、自らの言葉で詳しく説明できるように促したい。

短歌は、一九三三年生まれの石川不二子から、二〇二三年現在三十代半ばの服部真里子まで。俳句は、一八六七年生まれの正岡子規から、二〇二三年現在四十代に差しかかったばかりの高柳克弘まで。幅広い年代の作者に触れられるように配慮した。また、伝統文化に触れさせるために、「雉始雊」の中で出てくる「臘梅」が詠まれた山田みづえの一句、小説中で話題となっている二十四節気の代表例「立夏」が出てくる春日井建の一首を採録した。

短歌や俳句というと、現実にあったことをそのまま素直に詠むものだと思っている生徒が少なくない。ここでは、生徒がイメージする詩歌の作品世界が現実だけに縛られないようにと、憧れの世界を詠んだ服部真里子の歌や、幅広い読解を許容する高柳克弘の句を入れた。

従来の「現代文」で扱われた詩歌のラインナップとは趣を変えた四首、四句であるが、どれにも作者それぞれの意匠がこらされており、深みがある。小説と関連づけなかったとしても、これらの詩歌だけで、文学のおもしろさ、豊かさを十分に感じることができるだろう。授業の展開に沿って、生徒たちの学習状況に合わせて、さまざまな角度から詩歌を取り上げたい。

◉作者

近・現代の短歌

・石川不二子（いしかわふじこ）［一九三三―二〇二〇］歌人。「短歌研究」第一回五〇首詠で推薦となった。高校教諭を経て、大学時代の仲間たちと農地を開拓し、自然との触れ合いを詠んだ。歌集に『牧歌』『鳩子』など。

・春日井建（かすがいけん）［一九三八―二〇〇四］歌人。中井英夫に見いだされ、総合誌「短歌」に五〇首を発表しデビュー。第一歌集『未青年』は三島由紀夫に絶賛された。他の歌集に『白雨』『友の書』など。

・佐藤弓生（さとうゆみお）［一九六四―］歌人。第四十七回角川短歌賞を受賞。短歌によって、日常と非日常とを往還する自在な世界観を打ち立てる。歌集に『世界が海におおわれるまで』『眼鏡屋は夕ぐれのため』など。

・服部真里子（はっとりまりこ）［一九八七―］歌人。第二十四回歌壇賞を受賞。選び抜かれた歌の言葉によって、あこがれや理想の世界を突き詰めている。歌集に『行け広野へと』『遠くの敵や硝子を』。

近・現代の俳句

・正岡子規（まさおかしき）［一八六七―一九〇二］俳人・歌人。俳句と短歌の革新運動を推進した。新聞記者として活躍した。カリエスにかかり、松山にて療養生活を送った。著書に『病床六尺』など。

・対馬康子（つしまやすこ）［一九五三―］俳人。有馬朗人の「天為」創刊に参加。対象を丁寧にとらえつつ、そこから自らの内面に響き合う要素を見いだしていく。句集に『愛国』『純情』など。

・高柳克弘（たかやなぎかつひろ）［一九八〇―］俳人。第19回俳句研究賞を受賞。小川軽舟率いる「鷹」で編集長を務める。自然や人事のなかに、現代人のさまざまな屈託を詠む。句集に『未踏』『寒林』など。

・山田みづえ（やまだみづえ）［一九二六―二〇一三］俳人。第14回角川俳句賞を受賞。句作により、季語に新たな力を見いだした。「木語」を主宰し、石田郷子などに影響を与えた。句集に『忘』『木語』など。

◉出典

近・現代の短歌

・石川不二子「いつくしき雉の雄鳥はひもじきや堆肥の山を踏み越えてくる」
　出典は、石川不二子歌集『鳩子』（一九八九年、不識書院）。

・春日井建「為せしより為さざりしこと思ひ浮かぶ一夜しづけし立夏を迎ふ」
　出典は、「春日井建百首」（大塚寅彦選）（一九九八年、「ＮＨＫ歌壇」）のテキストに掲載された記事による。

・佐藤弓生「とんかつ屋さんで待ってる切りたてのきゃべつ乾草みたいに積んで」
　出典は、佐藤弓生歌集『眼鏡屋は夕ぐれのため』（二〇〇六年、角川書店）。

・服部真里子「草原を梳いてやまない風の指あなたが行けと言うなら行こう」
　出典は、服部真里子歌集『行け広野へと』（二〇一四年、本阿弥書店）。

近・現代の俳句

・正岡子規「雛祭る田舎の家や桃の雨」
　出典は、『子規全集　第三巻』（一九七七年、講談社）。

・対馬康子「夫婦の夜氷菓の中に匙残し」
　出典は、『対馬康子集』（二〇〇四年、邑書林）。

・高柳克弘「亡き友のメールアドレス秋の虹」
　出典は、高柳克弘句集『寒林』（二〇一六年、ふらんす堂）。

・山田みづえ「臘梅を無口の花と想ひけり」
　出典は、山田みづえ句集『木語』（一九九七年、邑書林）。

◉作品の大意・語句・文脈の解説

［55ページ］

近・現代の短歌

「いつくしき……」石川不二子

【大意・鑑賞のポイント】

雄の雉は、逞しく生き抜いている。だが、そんな威厳のある雄鳥が、臭いを放つ堆肥の山を踏み越えてやってくるとは、きっとひもじくて、すぐにでも何か食べたくて、こちらへ急いで来たのだろうか。

田舎の農場のワンシーンを描いた歌である。雉が堆肥の山を堂々と歩いて来る姿は、自然の中で生き抜いている鳥の逞しさとともに、ほのかなユーモアを感じさせる。

「ひもじきや」で切れる、三句切れ。

【語句・文脈】

・**いつくしき**　シク活用の形容詞「いつくし（厳し）」の連体形。「いかめしい、威厳がある」の意。

・**ひもじきや**　シク活用の形容詞「ひもじ」の連体形「ひもじき」に、疑問の係助詞「や」をつなげたもの。「ひもじいのだろうか」の意。

・**堆肥**　稲わら、落葉、家畜の糞尿などをまぜて腐熟させ、肥料としたもの。

「為せしより……」春日井建

【大意・鑑賞のポイント】

これまでの人生で、私が成し遂げられたことより、成し遂げなかったことのほうが次々と思い浮かぶ。過ぎ去ったあれこれを思い出しては、切なくなる。今夜は、なんて静かなんだろう。今日、立夏を迎えた。

にぎやかで活動的な夏の始まりを、こんな静けさの中で迎える知識人の、思索のひととき。

「一夜しづけし」で切れる、四句切れ。

【語句・文脈】

・**為せし**　「為す」の可能動詞である「為せる」（口語文法に則った下一段活用動詞）の連用形「為せ」に、過去の助動詞「き」の連体形「し」をつなげたもの。「成し遂げられたこと」の意。

・**為さざりし**　サ行四段活用の動詞「為す」の未然形「為さ」に、打消の助動詞「ず」の連用形「ざり」、過去の助動詞「き」の連体形「し」をつなげたもの。「成し遂げなかったこと」の意。

・**しづけし**　ク活用の形容詞「静けし」の終止形。

・**立夏**　二十四節気の一つ。夏の始まりを意味する。

「とんかつ屋さんで……」佐藤弓生

【大意・鑑賞のポイント】

私は、とんかつ屋さんで、あなたを（または、大切な誰かを、何かが起きるのを）待っているよ。お皿の上に、とんかつの付け合わせの千切りきゃべつを、乾草みたいに高く、こんもりと積み上げながら。

誰かや何かを待つひとときの、期待する心の豊かさ、または何かを待ち望む心境を、こんもりと形よく積み上げていく千切りきゃべつに仮託している。

初句、二句の切れ目は「とんかつ屋・さんで待ってる」であり、「とんかつ屋さん」という言葉が「句またがり」になっている。「待ってる」で切れる、二句切れ。「切りたての」から読み始め、最後まで至ったら最初に戻って読み継ぐことができる、倒置法。

【語句・文脈】

・**乾草**　「干し草」と表記することも多い。干して乾燥させた牧草のこと。家畜の餌にする。

「草原を……」服部真里子

【大意・鑑賞のポイント】

広々とした草原に立つと、風が吹いてくる。草花を揺らし、私の心まで揺らそうとする風の力。まるで風が指を持っていて、その指が手櫛となって草花を梳いているようだ。風は一時も休まず、草原全体を梳き続ける。私の心も、この草原のように、揺れに揺れているけれど、今、決めた。あなたが「行け」と言うなら、私はそこに行く。

心を決めるひとときを、ドラマチックに詠む。

「風の指」という比喩、見立て。「風の指」で切れる、三句切れ。

【語句・文脈】

・**～てやまない**　そういう状態が衰えずに続いていくこと。

［５６ページ］

近・現代の俳句

「雛祭る……」正岡子規

【大意・鑑賞のポイント】

桃の節句。雛祭り。この田舎の小さな家には、育ち盛りの女の子がいて、その子のためにお雛様を飾って華やいでいるのだな。折から春雨が降っていて、桃の季節にふさわしい、しっとりとした、胸にしみるような潤いをもたらしている。

これから大きく成長していく女の子に、まるで恵みを与えてくれるような雨。未来へ向けての希望が湧いてくる一句である。

春の季語「雛祭る」。「桃」も出てくるが、一般に「桃」は秋の季語となる。ここでは桃の花を愛でる季節、桃の節句に降る雨として「桃の雨」と詠まれている。「田舎の家や」で切れる、二句切れ。「や」は切れ字。「桃の雨」で終わる、体言止め。

【語句・文脈】

・**や**　切れ字。俳句で多く用いられる切れ字は「や」「けり」「かな」など。

切れ字がついたところが感動の中心だ、と言われるが、ここでは、ふと見かけた家が「田舎の家」であることを強調しながら、「こんな田舎でも雛を祭っているのだな」「子どもをだいじにする気持ちは、田舎でも変わらないんだな」と感心した、と読み取れる。

「夫婦の夜……」対馬康子

【大意・鑑賞のポイント】

夫婦二人で過ごす夜。語り合ううちに「アイスでも食べようか」ということになり、アイスクリームを食べ始める。子ども同士に戻ったかのように気持ちが華やぐ。アイスの器の中に匙を入れたまま、片付けもせずに、夢中になっておしゃべりは続く。しゃべり疲れると、なんとなく互いの顔を見つめたりして、相手の大切さをしみじみ感じる。そんな二人の夜である。

「氷菓の中に」とあるのだから、アイスを少し食べ残したのかもしれない。おしゃべりに夢中になって、アイスを食べるのが二の次になったのかもしれない。もちろん、特に語り合うこともなく、なんとなくアイスを食べただけで終わる、二人の静かな夜、という読解も成り立つだろう。

夏の季語「氷菓」。「夫婦の夜」で切れる、初句切れ。「匙残し」は、言いさし表現。

【語句・文脈】

・**氷菓**　アイスクリームやアイスキャンディーなど、凍らせて作った菓子。ここでは「匙」が出てくることから、アイスクリームだと思われる。

「亡き友の……」高柳克弘

【大意・鑑賞のポイント】

パソコンで作業をしている。ふと亡き友からのメールが残っているのを見つけた。友の人柄、個性がにじんでいる、ユニークなアドレス。このアドレスを打ち込んで、何度もメールのやりとりをしたっけ。もう会えない人だけど、今、メールを打ってみたら、次元を超越して、友に届くような気がする。窓の外には、ひっそりと光る、秋の虹。

秋の季語「秋の虹」。「メールアドレス」で切れる、二句切れ。

【語句・文脈】

・**秋の虹**　もともと「虹」は夏の季語。「秋の虹」というと、夏のそれより勢いや輝きはないものの、ひっそりと空にかかる風情に、心ひかれる人は多いだろう。

「臘梅を……」山田みづえ

【大意・鑑賞のポイント】

臘梅は、42ページの脚注②に「冬に蝋細工のような黄色い花を咲かせる中国原産の落葉低木」とある。その臘梅の小さい花は、こんな寒い時期に文句も言わずに咲いている。無口だけれど、そのぶん我慢強く、心から信用できる友のような小花だ。この花を「無口の花」と思って、これからも毎年眺めることにしよう。

冬の季語「臘梅」。「想ひけり」で切れるが、そこは結句の終わりであるため「句切れなし」とする。

【語句・文脈】

・**けり**　切れ字。俳句で多く用いられる切れ字は「や」「けり」「かな」など。切れ字がついたところが感動の中心だ、と言われるが、ここでは「無口の花」と思い決めたことを強調し、自分と花との間に深いつながりが生まれたことを喜んでいるように読み取れる。

◉読み比べのポイント

探究教材として採録された四首、四句には、小説「雉始雊」の中に出て来るさまざまな題材が、形を変えて詠まれている。前項「探究――考えを深め

る」の②でも触れたが、小説と詩歌、読み比べのポイントを挙げ、前項より少し詳しく解説する。

・石川不二子の短歌――「雉」。小説の中には雉の「ロミオ」が登場しているが、ロミオの姿形や動作などについては書かれていない。短歌の「雉」の動作、雰囲気を楽しむことができたら、小説の「ロミオ」がどんな様子かを想像するきっかけとなるだろう。

・春日井建の短歌――「一夜」「立夏」。小説では、夫婦が語らう夜、自宅に持ち帰った仕事に取り組む深夜が描かれている。また、「二十四節気」に触れられているため、その一例として「立夏」が詠まれている歌を掲載した。さわやかな、活動的な夏の始まりを予感させる「立夏」が、短歌では深い思索のひとときとして描かれている。「雉始雊」の夫婦は、二人とも調べ物をしたり、研究したりすることがベースとなる仕事をしている。この短歌の世界観が似合う二人であろう。

・佐藤弓生の短歌――「とんかつ屋さん」。小説では、「わたし」が「コシガヤさん」と会った場所としてとんかつ屋が描かれている。「わたし」にとって、とんかつ屋さんは少し特別な場所。そこで「待ってる」と詠まれた短歌を通して、生徒一人ひとりがとんかつ屋さんにどんな印象をもっているのかを話し合うきっかけが得られるだろう。

・服部真里子の短歌――「草原」「風」「あなたが行けと言うなら行こう」。小説では、散歩するときに見る景色や、「空っ風」（49・13）が出てくる。また、小説の結末で、両親を亡くした「あなた」が「よかったら一度、遊びにいらっしゃい」と伯母から誘われていることがわかるため、その状況を思わせる歌を掲載した。短歌に詠まれた草原は、「わたし」が「たぬ吉くん」を連れて散歩する広々とした光景にも重なるだろう。

・正岡子規の俳句――「田舎の家」。小説では、田舎の夫婦二人暮らしの家の様子が描かれている。

・対馬康子の俳句――「夫婦の夜」。小説では、夫婦で語らう夜の場面が描かれている。「わたし」と「サネスケ」なら、二人一緒にアイスを楽しむ場面が想像しやすいだろう。

・高柳克弘の俳句――「亡き友」。小説の中で「わたし」は妹のことを「仲良しの大事な妹」（53・6）と言っている。亡き人をしみじみ思い出す俳句は、この小説の続編の一節のように読めるだろう。

・山田みづえの俳句――「臘梅」。小説の中に、「黄色い蝋梅がたくさん咲きました」（42・3）という記述がある。

小説「雉始雊」を読んだあとで、対馬康子の俳句を読むと、「氷菓の中に匙」を残したのは、「わたし」と「サネスケ」がのんびりと語らった夜のように感じられるかもしれない。小説の中に描かれているのは、夫婦の冬の場面だけだが、この句によって「この夫婦は夏になったら一緒にアイスを食べたりするんだろうな」と想像が膨らむだろう。小説内で示されたわずかな時間だけでなく、詩歌によって、読者の胸の中に、登場人物の世界がどんどん広がっていく。

もっと深読みすると、小説の「わたし」と「サネスケ」は、「あなた」を迎えるにあたって、二人で深刻な話し合いをしたかもしれない。自分のペースを守って気ままに暮らしてきた二人にとって、「あなた」を引き取るのは決して簡単なことではないはずだ。そう考えると、対馬の句で「匙残し」と詠まれていることに、何か不穏なイメージが生まれる。春日井建の「為せしより」の歌にも、妹を亡くした悲しみ、「あなた」を引き取ることへの決意がにじんでいるように思える。

小説と詩歌。同じような題材を描いていても、それぞれ、雰囲気は全く違っている。読み比べによって、思いがけない解釈や、新たな作品世界が、読者の胸の中に生まれることを期待している。

◉授業に際して

教員が授業で生真面目に「小説と、探究教材の詩歌に、どんな関連性があるのか考えよう」と問いかけなくてもいい。小説を読み終えてから、さりげなく、これらの詩歌を読み味わってもらうようにしたい。

探求教材の扱いは、「探究――考えを深める」の②に示されている。それを確認し、あとは詩歌について、感想を自由に語り合う時間をとることが望ましい。

小説の余韻を味わいながら、生徒一人一人の胸に詩歌の言葉がどのように響くのか。生徒たちの感受性の豊かさを信じ、思いがけない感想を期待したい。

学習指導をさらに深めるために

◉作品解説

第二単元には小説二編を採録した。青山七恵「予感」では「物語の展開に伴って疑問が深まっていく過程を読む」、この絲山秋子「雉始雊」では「物語の展開に伴って全容が明かされていく過程を味わう」という学習ポイントを掲げている。

二編を対照的にとらえ、「小説って、どんどん疑問が深まっていくなあ」「小説って、こんなふうに伏線が回収されるんだなあ」と生徒たちに、現代文学の豊かな企みを感じてもらえたら幸いである。

ただ、「物語の全容が明かされていく」「伏線が回収されて、結末に驚く」というポイントだけで「雉始雊」を読んでしまうのは、少しもの足りないという方も多いだろう。

絲山作品の魅力は、人間味あるドラマにある。仕事も、恋愛も、家族とのやりとりも、それらの思いがけない側面を鮮やかに切り取り、小説世界として簡潔に示してくれる。人としての弱いところ、悲しいところも切り捨てず、きちんと提示してくれる。その真っ正直さがわたしたちの胸を鷲掴みにする。

読者は、ページをめくるひとときに、その小説世界にこころを遊ばせるものだ。「雉始雊」も、結末に驚き、随所に仕掛けられた伏線の見事さに感心するだけに終わらず、ここに描かれている世界に入り込み、山並みを眺め、空っ風を感じ、夫婦のやりとりの中に身を置いたほうが幸せだ。

生徒の中には、「田舎の自然豊かな暮らしっていいな。でも、夜は静かで怖いかもしれないな」「この夫婦の会話、仲のいい親友のやりとりみたいだな」「たぬ吉くん、かわいいな」「雉のロミオを見てみたい」のように、作品世界を楽しむ人も少なくないだろう。

授業では、「小説の中で、結末に向かってどんな工夫が凝らされているか」を解明し、それで作品全体を読み切ったように思えるだろうが、さらに探究

教材の短歌・俳句と読み比べながら、もう一度小説世界を味わい直させたい。絲山が構築した人間味あるドラマに、その世界観に身を浸す幸せを知ってほしい。

物語の展開、解釈の可能性、などにとらわれ過ぎると、小説の魅力そのものを蔑ろにしてしまうこともある。ぜひ「雉始雊」の作品世界をのびのびと味わうひとときを、授業の中で大事にしたい。

◉教材研究・授業研究のための文献

絲山秋子を知るために

- 『イッツ・オンリー・トーク』絲山秋子（二〇〇六年、文春文庫）
- 『袋小路の男』絲山秋子（二〇〇七年、講談社文庫）
- 『逃亡くそたわけ』絲山秋子（二〇〇七年、講談社文庫）
- 『沖で待つ』絲山秋子（二〇〇九年、文春文庫）
- 『離陸』絲山秋子（二〇一七年、文春文庫）
- 「来たるべき書き手たちへ　ニートが作家になるとき　ただなるのでなく続けていくために必要なもの」絲山秋子と星野智幸との対談　「ユリイカ」二〇〇六年二月号（二〇〇六年、青土社）
- 「新人の条件」絲山秋子インタビュー　「小説トリッパー」二〇〇四年夏号（二〇〇四年、朝日新聞出版）

二十四節気などの伝統文化に触れるために

- 『暮らしの中の二十四節気　丁寧に生きてみる』黛まどか（二〇二一年、春陽堂書店）
- 『覚えておきたい　日本の美しい季節の言葉』日本の言葉研究所（二〇一七年、だいわ文庫）

◉読書指導・発展学習のための文献

短歌・俳句の理解を深めるために

- 『俳句部、はじめました』神野紗希（二〇二一年、岩波ジュニアスタートブックス）
- 『俳コレ』週刊俳句編（二〇一一年、邑書林）
- 『短歌は最強アイテム』千葉聡（二〇一七年、岩波ジュニア新書）
- 『短歌タイムカプセル』東直子、佐藤弓生、千葉聡編（二〇一八年、書肆侃侃房）

現代小説に親しむために

- 『小説の惑星　オーシャンラズベリー篇』伊坂幸太郎編　絲山秋子「恋愛雑用論」が収録されている。（二〇二一年、ちくま文庫）
- 『日本文学100年の名作第10巻 2004-2013』絲山秋子「神と増田喜十郎」が収録されている。（二〇一五年、新潮文庫）

コラム　浦島太郎、空に舞う

◉教材選定のねらい

小説「雉始雊」の中では、二十四節気や七十二候に触れられている。さらに探究教材として、長い伝統をもつ短歌・俳句が採録されている。この第2単元には、文学を、伝統文化との関連から学ばせるというねらいがある。

コラム「浦島太郎、空に舞う」では、単元学習のしめくくりとして、「地域の人に、その土地の民話について尋ねてみよう。」と呼びかけている。現代の生徒たちには、その地域の民間伝承を語ってくれる人を見つけることは難しいだろうが、授業では、どの地域にもそれぞれ、人々の願い、あこがれ、怖れなどがこめられた伝え話があることを確認したい。民間伝承、民話は、その地域に今生きている若い世代の胸にも、さまざまな音色で響くことだろう。

コラム中に示されている、浦島伝説のさまざまなバリエーションは、図書館やインターネットで簡単に調べられる。日本に限定せず、海外にも目をやると、浦島太郎と同じパターンの伝説が、各国にあることがわかるだろう。生徒の学習状況に合わせて、コラムをのびのびと活用したい。

◉活用のヒント

学習活動のパターン1　民話を集めよう

コラムの末尾に掲げられた「地域の人に、その土地の民話について尋ねてみよう」に応えて、実際に地域の方から民話を聞き取る。町内会や自治会などに、その地域に長くお住まいの方を紹介していただき、その方を訪問して、民話を語っていただく。スマートフォンなどで録音して、あとで聞き取りながらパソコンでテキスト化する。採集した民話を小冊子にまとめ、文化祭で配布するのもいい。

だが、地域によっては、民話を語ってくれる方を見つけるのは難しい。その場合、次のような方法もある。

- その地域の図書館や公民館で、絵本の読み聞かせや語り聞かせの活動をしている方を紹介してもらい、民話を語ってもらう。その方が地域のお年寄りから聞き覚えた民話ではないかもしれないが、「民話はこんなふうに伝えられてきたのだろう」という雰囲気を味わうことができる。また、読み聞かせ、語り聞かせの活動をしている方から「民話の魅力とは」をテーマに講演してもらうことも、伝統文化への理解につながるだろう。
- 学校の職員に「この学校に、昔、勤めていた先生」を紹介してもらう。昔の先生に会って、「昔の学校の様子」を話してもらう。十年、二十年昔の話でも、状況によっては「民話」のような意味合いをもつ。お話を録音してテキスト化し、「学校の昔話」としてまとめるのもおもしろい。

学習活動のパターン2　民話のバリエーションを集めよう

実際に、地域の方から民話を聞き取ることは難しいが、図書館やインターネットで、民話のさまざまなバリエーションを調べることは容易だ。コラムに紹介されている浦島伝説なら、『万葉集』、『日本書紀』、京都の浦島伝説だけでなく、各地にいくらでも見つけ出すことができる。生徒たちはアンドリュー・ラングの童話集から、「海外に伝えられた浦島太郎」を読むことも可能だ。「かぐや姫」の物語も、日本各地のみならず、海外にも類話が多い。よく知られた民話をテーマとして、それぞれが地域によってどのように違って伝えられているのかを分析し、レポートにまとめるといい。

学習活動のパターン3　新たな民話を生み出そう

民話について資料などを調べたあとで、発展学習として、新たな民話を書いてみる。語り伝えられた民話には、昔の人々の願いなどが込められている。今の自分たちの願いを込めて、新たな民話を創作する。もしかしたら、この活動を通して、一千年後に残る本当の民話が誕生するかもしれない。

◉語句・文脈の解説

［57ページ］

上３「笠地蔵」「かさじぞう」は、日本の各地に伝えられる代表的な民話。「笠長者」「かさこ地蔵」とも言われる。道端の地蔵に親切を施した貧しい者が、その恩返しを受けるという話。

◉図版の解説

浦島太郎出生の地碑（京都府京丹後市）［写真提供］PIXTA

この写真と同じように、さまざまな地域に昔ながらの石碑が残されている。地域の石碑を探して、そこに書かれた字を解読し、昔の出来事を掘り起こすことも、民話の採集につながるだろう。

単元の振り返り

五編の中心教材や探究教材、コラムなどを通して、本単元の学習を学習者自身で振り返るとともに、今後の課題を発見し、学習意欲を引き出すことができるように配慮して、次のチェック項目を設定した。

□作品に対して、さまざまな読み方や解釈の仕方を考えることができたか。
□作品にみられる謎に興味をもち、考えながら読み進めることができたか。
□ここで学んだことをどのように生かしていけると思うか。

いずれも「学習者自身が行う自己評価」であり、授業者が行う「学習評価」ではない。学習者自身が自分の学習に対して、成果と課題を意識し、次の学習へとつなげる意欲を喚起することをねらいとしている。